

「*****」(我々は道教の教えを学ぶために中国に来ました。泰山には、仙道を修行している人たちが居るとの思いから、そういう方々にお目に掛かり、その方々のこの世界の認識の仕方を知りたくて来ました。わたくしたちは、生命は永遠で、すべての存在の根源は一つ。自分という存在は無く、この世界が、その根源を写し出した世界だと考えています。ですから、不老長寿を求める必要はないと思っているのです。道教の修行者の方達は、不老長寿をどのように捉えているのでしょうか?)

「*****」(わたしたちのこの世界についての見方も、あなたの見方と似ています。しかし、この世界における人間の生命は生まれたときに与えられたエネルギー一体である身体と意識の元である気とが一体となって存在するもので、有限の寿命しか持っていないと考えています。それは、人間が必ず死ななくてはならないという事実があるからです。誕生したときに、ここに現れた存在としての自分は死と共に、宇宙のエネルギーに戻るのです。この世界ではすべきことが山のようにあり、それをやらずに死を迎えるのは、人生を完遂したことにならないと考えているのです。ですから、できる限りの長寿を手にし、自然の中に溶け入って生き、この世界でのべきことを達成して自然に戻りたいと考えているのです。その長寿を得るために修行をしています。これまで、わたしはこの仙道の修行を通して、意識で遠方のものを見たり、音を聞いたり、火の中を歩いたりすることはできるようになりましたが、まだ空を飛んだり、岩を通り抜けたりすることはできません。あなたたちはそれをいとも簡単にやってのけています。あなたたちは本当は何千年も生きている方々なのではないですか?)

賢は応えた。

「*****」(わたしは、おそらく何千年、何万年、何億年と生きていると思います。生命は永遠ですから。ただ、この世界へは、すべての人々と同じように短い期間だけ現れているのです。だから、この世界に現れている自己の写像を離れて、本来の自分に戻れば、この世界が規定しているものはすべて超越することができるのだと思います)

「*****」(わたしはすでに120歳を超えています。でもあなた

のような、若く見える姿に変貌することもできません。どうか、その秘訣を教えてくださいませんか？)

「*****」(それには秘訣はありません。ただ、完全にそうだと確信することです。そうすることで、この世界はそうなります。ただ思うだけではだめです。宇宙の全てのものを自分の意識で充たし、全てをそのように観ることです。それにはあなた方も行っている瞑想が最も近道でしょう。まあ、条件があるとすれば、全てを放棄すること、自分自身が完全に無くなること、何も求めないこと、そして、すべてを一つと見抜くことでしょう。見抜こうとしてはだめで、ただ、観照して自分がそのものになって、その核心に辿り着く必要があります。あなたならできるかもしれません。この世界では、あなたはそこにしか居ないように見えますが、それは次元が低いからです。一つ次元を上げれば、あなたの位置は確定できなくなります。それが、空中浮揚やテレポテーションという結果を生みます。紫色の雲に乗って空を飛んできた老子を観て、尹喜(ウエンシィ)が弟子にして貰い、教えを受け、老子が去るとき、「わたしを弟子として連れて行ってください」と申し出たら、老子が「君はまだ4方について知らないから、連れて行くわけにはいかない」と応えたと伝えられていますね。それは4つの方向ではなく、4次元ということなのです。次元を超えなくては道^{たお}を認識したとは謂えないと老子は言いたかったのでしょう。この世界が「虚と実の複合の世界」、あなた方の言葉では「陰と陽の交合した世界」であるということを実態として、認識することが最も大切なことなのです。人類はそれを普通のこととして認識できる時期に来ているのです。これは道教の教えの集大成でもあります。次の次元への移行は四方の3次元から五方の4次元への移行なのです」

賢の説明を聞いて、老人は呆然としてしまった。賢と梓は老人の生活している小屋を見せて貰った。部屋の中には何も無く、唯、干し草と石で囲った囲炉裏があるだけだった。賢は立ち寄らせてもらった札を言うと、梓の手を握り、飛翔しようとした。老人が、さっと賢の手を握った。

「*****」(やっと、理解できました。今まで内側を観るのは「道

胎」を生み天仙を得るためでした。しかし、それが、すべての根源に至る道であることを理解しました。わたしはこれからも修行を続けてゆきます。ただ、これからは目的を捨て、心にあるものすべてを捨てて、自己の根源に至る方向に向いて瞑想することにします。あなたにお会いできて、本当に嬉しく思います。あなた方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

賢と梓は枯れ木の枝で、自分たちの名前を苔生した岩の上に書き付けた。賢は再び右手で梓の左手を握ると、意識を泰山の上空に置いた。それは瞬間の移動だった。老人が膝を突いて空を見上げていた。

賢と梓が元の「落堡」^{らくほつ}の畦道に降り立った時は、もう陽も暮れ掛っていた。ふたりは駅に向かった。北京行きの電車は超満員だった。ふたりは東京の通勤時間帯の混雑は熟知していたが、まさか中国に来てまでラッシュアワーに遭遇するとは思わなかった。北京駅の雑踏の中を掻き分けるようにして、やっと改札を出た。

「あなた、楽しかったわね。わたくし夢の中に居るようです。時空間を縮めて半日で泰山まで行ってきた体験。話しても、誰も信用しないでしようね」

「まさにドリーム・タイムだね。本当に楽しかった」
タクシーを拾って、ホテルに着いたのは8時過ぎだった。レストランに行ってみると、鷺山、小塚、長谷部の3人が中ほどのテーブルでコーヒーを飲んでいて、賢はウエイターに言って3人の居るテーブルに向かった。

「遅くなっちゃって、申し訳ない。皆さん、もう食事は済みましたか？」
鷺山が応えた。

「市街のレストランで、また北京料理を食べてきました。先ほどホテルに帰って来たばかりです」

「それじゃあ、我々はここで簡単に食事をしますけどいいですか？」
3人は済まなそうに頷いた。賢と梓はサンドイッチとサラダを頼んだ。食事は直ぐに運ばれて来た。賢たちが食事を始めた。ふたりがホークを置いて一息吐くと、長谷部が言った。

「リーダー、インタビューは10人ほど行いました。十分かどうか分かりませんが、結構面白かったですよ。北京近辺には近代的な生活をしている富裕層の人たちから、その日の食べ物にも困る貧乏な人まで様々な人たちが住んでいました。共産主義の政府の元で、どうしてこれほどまでに貧富の差が拡大しているのか不思議でなりませんでした」

梓が言った。

「長谷部君、君はそれで、人の意識という点ではどんなことを感じたの？」

「はい、やはり唯物的な思想が強いと感じました。あくまで現世の生活レベルを向上させることが、人生の最大の目標となっているようで、金持ちの人達は天下でも取ったような奢った心を持っていました。勿論インタビューした人からしか意見を聞いていませんから、すべての金持ちがそうだとは思えませんが、少なくとも安定した生活をするのが人生における最重要課題の様でした。貧しい人についても同様に感じました。彼らの人生の目的は、豊かな生活と、最近急激に豊かになった人たちが享受している生活様式を自分たちも手にすることで、それを到達目標にしているように感じました。それは逆に、現在の生活があまりにも苦しいからだと思われました。鷲山さんに、貧困な人たちが生活している場所に案内して頂いたので、極端に生活に苦しんでいる人たちに接して、直接意見を伺ったためでしょうけど。とても心の問題について質問できるような雰囲気ではありませんでした」

「それは、我々が予想していたとおりの結果ですね。インタビューした人の中に、あまり捉え処のない応え方をした人はいませんでしたか？」
賢が質問すると、小塚が言った。

「ひとり、解釈に困るような回答をした人がいました。年配者の男性の方ですが、「すべてはなるようにして、なっているから、今の生活はそれでいい」と言っていました。生活水準は貧しい部類に入りますが、「古い意識は消え、新しい意識が生まれる。古いものは破壊され、新しいものが創造される。全ては流れだ」と言っていました。満足しているのかと聞いたら、満足でも、不満足でもない、訳の分からないことを

言っていました」

「それは、あまりにも変化しすぎた社会を見てきたからだろうか？その老人の言葉が人生の達観からきているのか、逃避からきているのかは分からないね。道教の陰陽の考えに基づいた生き方のようにも思えるけど」鷲山が言った。

「ところで、おふたりは何処に行かれたのですか？駅に行ったということは、電車を使ったということですか？」

賢が応えた。

「泰山に行って来ました」

「泰山って、あの五岳神山の泰山ですか？」

「ええ」

「冗談でしょう。あそこまでは400キロ以上あるんですよ。行って戻って来るだけでも、特急を使ったって、まだ北京には着いていない筈ですが……」

「でも、行って来ましたよ。なあ、田辺さん」

「ええ、とても神秘的でした」

「でも、飛行機で行くわけもないし、そうかヘリコプターでしょう」

賢は空中浮揚のことは口にしたくなかった。

「結構、お金がかかったんじゃないですか？会社からは出してもらえないでしょう？」

ふたりは何も言わずに微笑んでいた。小塚と長谷部は目を剥いていた。

鷲山が更に聞いた。

「まさか、上まで登ったなんてことはないでしょうね」

「登りましたよ」

梓が言った。賢もにこにこしている。

「嘘でしょう!？よほどの体力がないと、あそこに登るのは無理ですよ」

「最後の所だけですよ」

「やっぱり、ケーブルカーを使ったんですね」

ふたりは笑みを返すだけで何も答えない。鷲山は質問を諦めた。

「あそこに行って帰ってきた人はいろいろなことを経験するようですね。」

だけど大抵の人は、泰山から戻ってからは、自分が神様に守られているような気がすると言っています。僕も一度行きたいんですが、なかなかそんな余裕はなくて。普通、最低でも3日は掛かりますからね。じっくり拝観するのなら、1週間は必要です。うらやましい限りですね」
小塚と長谷部も質問したいようだったが、ふたりがまたサンドイッチを口にしたので諦めた。賢たちの食事が済むと、鷲山は翌日の予定を説明した。午前中は気功師を訪れ、「気」の作用について説明を受けた後、「気」と精神との関係について話し合い、午後は気功治療の現場を見学することになった。鷲山が小声で言った。

「中国で、気功の話をするときは注意が必要です。当局が最も神経をとがらせていることですから」

「3500人以上が命を落としたというファーリンゴンやチュンゴワンの弾圧のことですか？」

鷲山は賢に対して、左手の人差し指を唇の前に立てて、声が大きいというジェスチャーをした。

「北京を出るまでは、そのような名称を口にしてはいけません。当局に目を付けられたら、個人としてこの中国に存在できなくなります。わたしに任せておいてください。明日は、わたしが促すまでは、相手のことは名前も何も一切聞かないでくださいね」

全員真剣な眼差しで頷いた。翌日の予定が決まると、鷲山は全員に挨拶して帰って行った。4人はそれぞれ自分の部屋に戻った。梓はシャワーを浴びベッドに身を投げると、賢の腕に抱かれて空中を浮遊したことが、ステレオビジョンの様に頭の中に展開されてきた。気持ちを奮い起こして意識を現実に戻し、この日の記録をPCに打ち込んだ。PCでの作業を終えると、放心したように再びベッドに身を投げた。あの感覚をもう一度味わいたかった。梓が瞑目すると、少しして、賢から電話が掛かってきた。

「賢だけど、梓、君と一緒に実験したいことがあるんだ。そっちに行ってもいいかな？」

「はい、待っています」

「あのね、部屋の鍵は掛けておいてね。君の前にテレポーテーションしてみたいんだ」

梓は、それもありかと思った。賢の奇異な行動に対して何ら抵抗感を感じなくなっていた。少しして、ベッドの前の空間が歪んでくるような感覚を覚えると、そこにぼんやりと賢の姿が現れてきた。輪郭が次第にはっきりしてきて、4、5分でいつもの賢の姿になった。賢はまだ目を瞑っている。更に3、4分すると、賢はゆっくり目を開けて言った。

「できた。これで自分の思うところに移動できるぞ」

梓は鳥肌が立った。

「こんな風に目の前の空間に人が現れるの、初めて見ました」

「うん。泰山に向かって移動したときは、方向と距離を意識したけど、今はそういう三次元的な尺度を考えないでやってみたんだ。これはかなり難しい。亜希子はできるようになったけど、僕はこれが初めてだ。一つ分かったのは、全て自分が作っているという意識を完全に自分の中に浸透させることだ。意識が完全に時空間を凌駕し、更にそれを超えないと、これは実現できない。今回は梓、君という存在にだけ焦点を絞り、それ以外のものは全て意識から外して、「君の居る場所に一緒に存在している」としてみた。意識は針の先の1000倍も細い部分に凝縮できるほどまでに集中して、研ぎ澄まし、リアリティはこの世界にあるどんなものより1000倍も強く高める必要がある。まあ、そんな感じかな」
「凄いです。もし、このことが知れ渡ったら、新しい時代の先魁として、世界中から大勢の人々が、あなたに教を請いに集まるわ」

「まだ、時期尚早だ。人々にとってはこの世界をどのように生きるかという命題の方がよほど重要で、空を飛んだり、遠隔移動したり、透視したりすることは、超能力のパフォーマンスに過ぎない。人々の間に、こういう動作の意味することを自然のこととして受け入れられる素地が出来るまで、待たなければならない。さもなければ社会が混乱してしまう。現在でも中国共産党の様に随の時代の妄想に捕らわれて、気功という純粹に心身の修練を目指す者達を恐れ、弾圧するようなことが起きているのだから」

「あなたのおっしゃる通りだと思います。わたくしもそのことが一番心配です。既得の権力者の中に、必ずこのような奇跡的なことを行うものを恐れ、弾圧しようとするものが出てくると思います・・・・あなた、もう一度泰山に連れて行って頂けませんか？この部屋から、あそこにふたりで行ってみたいのです。もう遅いからダメですか？」

賢は、梓が変なことを言うと思った。もう真夜中だ。泰山の上からは昼間のような美しい景色は、見えないだろうと思った。

「こんな夜中に、泰山に行ってどうするつもりだ？」

「ただ、あなたと泰山の周りを飛行したいだけです。もう一度」

賢は、部屋の中から、距離も方向も定めずに、特定の目的地に移動できるかどうか実験してみたくなった。賢は了解した。梓はベッドから降りると、賢の元に行き、自分から賢の左手を握った。賢は梓を自分に引き寄せて言った。

「さっきより、もっと存在として一体にならなければうまくいかないだろう。思い切り僕に抱きついて、僕と一体になっている状態を想起して、瞑想に入るんだ。いいね」

賢がそう言うと、梓は賢に抱かれている自分を想起し、意識と身体をその状態に置いた。賢は梓をしっかりと抱きしめて、瞑目し、意識を泰山の山頂に移動した。暫くすると身体に冷たい風を感じ始めた。

「梓、目を開けてもいいぞ。もう、泰山の頂上に居る」

梓は、夢心地でいた。賢の言葉に反応もしない。

「梓、着いたよ」

梓は漸く目を開けた。山頂は暗く、辺りがよく見えなかった。目が馴れてくると、空は一面の星の海だった。月は出ていない。降り立った場所が岩の上だったので、足下がおぼつかなかったが、賢は足を踏ん張って立った。梓はまだ賢にしっかりと抱きついていて、賢は梓を強く抱きしめてから言った。

「暗いね。見上げてごらん、まるで海の上に宝石をばらまいたかのようだ。いろいろな色が輝いているよ。ほら、見てごらん」

「あなた、お願いします。このまま暫くじっとしていてください。わたし

は、こうしてあなたの腕の中に居るときが、一番幸せです。他には何もありません。泰山でなくてもいいのです。どこでもあなたとふたりで居たかったから。ごめんなさい」

「分かっていたよ・・・ほら、空を見上げてごらん、こんなに美しい夜空は見たことがない。空気が澄んでいるからだろうな」

「あなたとふたりきりなもの」

賢がふと下方を見ると、そこにはホテルと思われる大きな建物があり、まだいくつかの窓に灯火がともっていた。昼間通り過ぎたときにはあまり意識していなかったが、夜になると、ホテルの存在が目立った。目を凝らすと遙か下方に微かに町の灯が見えた。真夜中なのにまだ灯が灯っている。梓は漸く賢から離れた。暗闇の中に、何人かの人影が動いている。夜空を楽しんでいるホテルの宿泊客の様だ。話し声が聞こえてきた。そのとき賢は、誰かが自分を呼んでいるのに気付いた。それは声ではなかった。意識への呼びかけだった。その呼びかけは、あの仙人修行をしている老人からだった。頭の中で解釈できる言葉に変換することができない。賢と梓は再び抱き合って空中に浮揚し、意識を老人の小屋の前に向け、そこに着地した。

「I appreciate you would visit me again. I would like to ask you the way to cancel gravity. If you could teach me the method, I will give you a herb pellet which brings you back to life when you are going to die.」(またわたくしの所に来て頂いて、感謝いたします。重力を無効にする方法について教えて頂きたいのです。もし、あなたがわたくしにその方法をお教え頂けたら、わたくしはあなたに死にかけたときに蘇生できる丸薬をさしあげます)

賢は言った。

「I don't want anything for it. I have already explained you everything. You just need strong concentration of your consciousness more than 1000 times of usual concentration, and grasp space field around you by your conscious. Then, intend to stay in the air.」(何もありません。わたくしはもう全て説明してしまいました。あなたは唯、あなたの意識を普通よ

り1000倍以上の強く集中して、あなたの周囲の空間の場をあなたの意識で捉えることが必要なだけです。そして、空中にいと意図するだけです」

闇の中でも、老人の喜ぶ顔が見えた。老人は紙に包んだ丸薬を賢に渡してよこした。賢は要らないと断ったが、どうしても受け取って欲しいと言われ仕方なく受け取った。瀕死状態からの蘇生など、賢は必要ないと思っていた。老人に別れを告げると、梓は再び賢にしがみつき、賢と一体化している状態を想定して恍惚となった。賢は一気に梓の部屋に戻った。部屋に戻っても、梓は賢から離れなかった。賢は静かに梓を離し、梓の額に軽く口づけをして、自分の部屋にテレポートした。梓は、まだ恍惚としていたが、直ぐにベッドに潜り込んだ。賢は部屋に戻ると、激しい疲労感に襲われた。丸薬をスーツケースに仕舞うと、先ず身体から邪気を払い、気の流れを強くして頭頂のチャクラを通して根源のエネルギーを自分の身体に注入した。エネルギーが体中に漲ってくると、この日の行動を逆に辿る省察を行った。この日は自分の中に画期的な能力を確立できた。賢は、これによって、今後は様々な場面で超人的な力を発揮できるということ意識した。

翌朝、鷺山は別の車で来た。全員揃っていることを確認してから8時丁度に出発した。梓は既に帰国便の確保を済ませていた。鷺山は全員と挨拶を交わしてから賢に向かって言った。

「どうしても、昨日のことは腑に落ちませんでした。でも、腑に落ちないままにしておこうと思います」

賢は頷いた。鷺山が最初に4人を連れて行った場所は、北京市内から北部の郊外に向けて1時間ほど走った辺鄙な場所にある、古い建物群のある場所だった。鷺山は空地に車を止めると、辺りに誰も居ないことを確認してから、賢に向かって言った。

「これから行く場所は、一見農家のように見える家ですが、そこには昨日あなたが話した、弾圧を受けたグループの気功師が住んでいます。弾圧を逃れるために、ここに隠棲しているのです。くれぐれも昨日の注意をお忘れ無く」

そう言うと、鷺山は通りを折れて2軒目の農家風の家の入り口の扉を叩いた。一人の45、6歳の顔が丸く細目で、背の高い男性が姿を顕した。男性は鷺山に向かって頷くと、何も話さずに奥に向かって歩いて行った。鷺山は全員に附いて来るように手招きした。4人は鷺山の後に従った。奥には一部屋あり、更にその奥にある部屋に入ると、そこには5人の男性と3人の女性が、互いに同調しているように、ぴたりと合ったリズムで気功の動作を行っていた。8人はまるで賢たちが入って来たことに気付かないように、なめらかで静かな動きを続けている。男はそこを通過して、もう一つ奥の部屋に入って行った。そこには木のテーブルがあり、長椅子が2脚あった。4人は鷺山に促されてその長椅子に腰掛けた。男性は自分用の古い椅子を持って来て座った。鷺山が挨拶した。

「*****」(今日は、時間を取って頂いて、ありがとうございます)
丸顔の男がそれに応えるよう言った。

「*****」男→鷺山：(時間はあるようで、無いのです。有ると思えば、無限にあります。危険を承知でよくおいでくださいました。)

言葉は静かだったが、声は低く響き、4人は空気の振動が身体に伝わってくるような感覚を覚えた。賢が言った。

「*****」賢→鷺山：(今日は、ありがとうございます。早速一つお聞きしたいのですが、中国では、もう、当局の認可なしに気功を行うことはできないのですか？以前はテレビの映像などで、中国内の様々な公園や、川の土手などで、朝に夕に気功を楽しんでいる人たちの姿が紹介されていましたが、最近は全くそんな映像に出合うことが無くなりました。皆さんも、このような家の中で気功をされていますし)

「*****」男→鷺山(彼らは我々の存在を恐れているのです。我々の仲間が大勢逮捕され、監禁状態に置かれ、更には、ある時は焼き殺され、ある時は高い崖から突き落とされ、またある時は生きた身体から内臓を取られて、移植用に海外に販売されたりしています。彼らは、共産主義という名称を使って、虚構の国を作り上げ、自分たちの権力を守るためにあらゆる手段を講じています。過去の封建時代の暴君を思わせる行為を行い、それらの行為を嘘で覆って発表し、正当化しています。我

々はこの国に生まれましたから、何とかここで生き抜くつもりです。この国が正常な人間の意識の巡る国になるように願い、自分たちの意識を少しずつ働きかけて努力しているのです。彼らの恐れは我々の人数に対してだけではないのです。我々が宇宙の理を説き、彼らの誤りを正そうとするだろうと思い、恐れているのです。自分たちが行ってきた、不正や暴挙、弾圧を正当化し、共生の生き方に逆行する独自の共産主義を押しつけて、既得権益を守ろうとしているのです。彼らのやっていることは正常な人間のやることじゃありません」

丸い顔の男は心の底から込み上げてくる怒りを静かに放出していた。賢が言った。

「*****」 賢→鷲山：「まだ、中国には自然のバランスを取り戻す素地が出来ていないのでしょうか。でも、淀んだ水もいずれ、高いところから低いところに向かって流れ始めるでしょう。何時までも、自我から生み出された虚構と、それを隠す嘘を、大勢の人間の意識が受け入れているわけはありませんから・・・・・・話が現体制の批判に向いてしまいました。僕の質問が、いけなかったですね。もう一つ質問してもいいですか？」

男性がほんの僅かに微笑んだように賢には思えた。

「*****」 男→鷲山：（勿論です。是非わたくしたちの教えを理解してください）

「*****」 賢→鷲山：（ファーリンゴンの教えの概要を教えてくださいませんか？）

「*****」 男→鷲山：（はい。教えの内容も、主要な書籍の内容も全て、WEBからダウンロードできるのですよ。でも、概要をかい摘んで説明しましょう。それと、重要な規則についても・・・・我々の教えはよく誤解されますが、佛教ではありません。言ってみれば佛教と道教の両面を併せ持つ教えです。功法と呼ぶ功を高める修法を行いますが、これは佛教的なものではありません。最近行われている気功の気というものとも違います。功はエネルギーで「霊体」の様なもの。徳の繰り返しによって蓄積されます。「真・善・忍」という宇宙の最高特性への同

化を元に、宇宙の演化原理に基づいて修煉する功法なのです。演化という言葉は概念として難しいかもしれませんがこの世界の教化、変遷、発展、転化、創成を意味する言葉です。その次に、心性の修煉を重視します。心性の修煉は功を伸ばす鍵で、心性の高さが功の高さと捉えています。心性というのは、徳と業力の転化、忍耐、悟り、欲望と執着心の放棄、苦中の苦への忍耐など様々な修煉すべきものです。その修煉は最終的に人の執着心を放棄させるプロセスなのです。この教えは完璧な一對の性命双修の修煉功法です。心性を修めると同時に肉体である命も修めます、即ち動作について五つの功法を煉功します。煉功に先立ち、先ず心性を修め、それから煉功するのです。動作は基本的に補助的な手段で、心性を修めずに動作のみの煉功では功を伸ばすことはできません。一方、動作を練習せず心性のみの修煉は功力の向上を妨げ、我々が認識する心身一体としての身体を変えることができません。昔から多くの人々が長期間に渡って煉功してもなかなか功が伸びませんでした。我々は、心身同時に修煉するべしという理を先生から教えて頂き、知りました。功が伸びないということには二つ根本的な原因があります。先ず、高次元の法が分からないために修煉ができないこと、もう一つは内に向かったの修煉をせず、その結果として心性が修煉できない為です。我々は法輪という霊的なセンターを置き、それを中心として修煉します。法輪は、絶えず回転している高エネルギー物質です。丁度ヨガでいうチャクラの様な存在です。自動的に修煉者にエネルギーを補給し、煉功を補助しています。つまり、煉功していない間でも、法輪は絶えず人を煉っています。これがこれまでに無い、我々独自の教えです。「法が人を煉る」という修煉の方法です。我々の教えには大まかに言って八つの特徴があります。先ず第1に法輪を修煉するが、丹を煉らないそして結ばない。つまり不老長寿の薬を造ったり、それを用いて身体に根を張らせたりさせるようなことはしない。2番目に煉功していない間も、法輪は人を煉っている。3番目は主意識を修煉するために自分が功を得る。4番目は心性を修めるばかりでなく、命つまり肉体も修める。第5番目は五つの動作功法は簡単に学習できる。そして第6、意念を使わない。その結果、功が速く

伸びる。7番目は場所、時間、方向を問わず煉功し、煉功終了の動作にこだわらない。そして最後に先生の法身は危険から修煉者を守っている。以上の8つの特徴があるのです。

この修法は個を保ちながら宇宙原理と一体となり、互いに融け合っ、それでも障りなく行うことができ、しかも動作は簡単です。正道の修煉は簡潔である必要があります。理論上、今までの修煉法と根本的に違っています。世間にある様々な丹を煉る（不老長寿の薬を造る）修法とも異なります。そして修煉の形態は法を学ぶことと、集団で煉功することに尽きます。学習者は修煉の感想と体験を交流し合い、共に向上することを図るのです）

賢はこの教えが、賢の認識する自己の本体に導く修法の教えであることを直感的に感じた。そして演化という言葉が、写像として映し出された社会を示しているのではないかと思った。丸い顔の男が言った。

「*****」男→鷲山：（もう一つ大切な教えがあります。それは我々の守らなくてはならない事項です。第一に道德の昇華を守らなくてはなりません。どこにあってもいい人になるように努めなくてはなりません。我々の修煉は人心を真っ直ぐにさせます。修煉者がまず社会的にいい人、善人になる必要があります。常に慈悲心を保ち、恨み心を持たず、苦を嫌がらず、どんな時でも他人のことを優先に考え、無私無我の境地まで昇華します。心性の修煉が第一で、心性の高さは功の高さです。これは絶対的な真理です。したがって、修煉者は皆自ら功法の要求に従い、宇宙最高の特性である「真・善・忍」に同化して自分に厳しく、他人に優しく、自分にも社会にも責任を持って振る舞います。職場では勤勉に務め、会社の指令に従い、無私に奉仕します。社会の法律を守り、道德を高め、悪事を働かず、常に善を求めます。お年寄りを尊敬し、慈しみ、幼児にやさしく、近所関係も睦まじい。名誉・利益に淡泊で、人と争わない。トラブルに遭ったらまず内に向かって自分の欠点を探す。誤解されても気にしない。日常生活の中では慈悲深い人になるよう常に心がけ、絶えず自分の嫉妬心、顕示欲、闘争心、歓喜心などを取り除くように努めます。次に、心性の向上を図らなくてはなりません。功理を理解し、

求める心を取り除き、心性の修煉に専念しなくてはなりません。心性が向上するにつれ、功が伸び、認識できる次元が高まり、体も浄化されます。無意識のうちに、無病の状態に至ります。この修法は病気治療のためではなく、修煉のためのものですが、堅実に修煉すれば、結果として、明らかな病気治療効果が取められます。三つ目に、社会に責任感を持ち、社会に有益な人になる必要があります。修煉者は常に「真・善・忍」の心を持ち、他人や出来事に対して自分の心性基準で自己を律します。社会に有益なことなら、名も残さず人に先立って働きます。社会や他人に迷惑をかけるようなことは一切しません。これが功修煉者の意識となるのです。その結果、修煉者は全社会の物質文明構築にも精神文明構築にも積極的な役割を果たすことになるのです。我々は形式にかかわらず、修煉を重んじます。管理機構を設けません。事務所も専任担当者もなく、組織規則、参加者名簿もありません。参加したい人はWEBや書籍から教えを学び、動作を習いたい人は煉功場に行けば、先輩や、教師級の人が無償で教えてくれます。修煉はあくまで自分の意志に基づいたものです。この『形式に捕らわれない形態』はその功法によるものです。修煉は自分のためですが、誰もそれを強要できません。本人に修煉の気持ちがなければ、厳しく管理しても仕方ありません。逆に、「真・善・忍」の心を持ち、法を以って師とする真の修煉者は善悪の分別をつけられるので、他人の管理を必要としません。言わば自分自身が法に基づいた指導者なのです、常に法で自己管理を行うことになります。このように説明すると、全く自由な教えなのかと誤解されるかもしれませんが、決してそうではありません。修煉者には厳しい心性と行動の基準が要求されます。例えば、勉強会はもっぱら修煉を指導する民間組織でなければなりません。経済団体や行政管理機構を一切介入させてはいけません。組織としての貯金、蓄物、病気治療も認めないのです。宗教的な宣伝をしてもいけません。国家の法律をきちんと守り、国家政策法規に反する行為は許されません。心性の修煉を本とし、国家政治への関与を禁じ、あらゆる政治的な紛争や活動への参与は更に禁止します。それに違反した者は修煉者として認めないのです。修煉に必要な書籍、資料、音声・

画像テープは正常な流通ルートを通して本屋で購入し、勉強会では販売してはいけません。勉強会とその責任者はたとえどんな理由、名目であっても融資或いは寄贈を受けてはいけないのです。どうですか、このようにして我々は修法を実践しているのです。だから、どんな弾圧に遭遇しても、決して挫けることはなく、逆に、修功への意志を一層強くしてゆくのです)

賢と梓はこのような修練をしている人たちが存在していることに驚きを隠せなかった。長谷部と小塚は無言のまま、唯聞き入っていた。賢が宇宙の原理の考え方について訊いた。

「*****」男→鷲山：(わたくしは、先生の教えを伝えるだけですが、先生は「道家が人体を小宇宙と見なしているのは非常に理にかなっている」とおっしゃっています。それはこの三次元宇宙のことを言っているではありません。科学が認識している物質身体の細胞以下はどんな状態かという、いろいろな分子成分をはじめ、分子以下は原子、陽子、原子核、電子、せいぜいクオークか更にその次の微粒子です。更に小さい微粒子は何なのかと、科学者は研究を続けていますが、それはあまりにも難しいのです。釈尊は晩年に「其の大は外無く、其の小は内無し」と言っています。如来の次元でも、大は宇宙の果てが見えず、小は物質の最小微粒子が見えないと言ったのです。釈尊は三千大千世界の学説も説いています。彼はこの宇宙、この銀河系に人類のような肉身を持っている生物の住む天体が三千個あると言っています。一方、一粒の砂にもこのような三千世界があるとも言っています。つまり、一粒の砂が宇宙のようなもので、中にはわれわれのような知恵を持った人も居れば、天体もあり、自然もあるというのです。もしそれが本当の話なら、考えてみてください。その世界の中にもまた砂がありますね？その砂にも三千世界があるはずでしょう。更に、その三千世界にもまた砂があつて、その砂にまた三千大千世界があるでしょう。如来の次元ではその底までは見えないのです。人の分子細胞も同じです。先生は、「この宇宙には果てがある」とおっしゃいます。しかし如来の次元でさえも宇宙を果てしなく無限に広いものと見ています。一方、人間の身体の内部、分子か

らマイクロ世界の微粒子までは、まるでこの宇宙と同じように広いのです。一人の人間や一つの生命体を作り上げる場合、その人の独自の生命成分やその人の本質は超マイクロの世界ですすでに出来あがっているのです。現代科学のこの方面での研究はかなり遅れていて、宇宙の他の天体に生きる高度な知恵を持った生命体に比べて、われわれ人類の科学レベルはきわめて低いのです。われわれが同じ時間、同じ場所に存在する他の空間の壁でさえ突き破れないのに、他の星からやってくる空飛ぶ円盤は直接他の空間を往来することができます。時空の概念が全く違うので、思うままに飛んで来たり、飛び去ったりすることができて、その速さは光速の様な遅い速度ではないのです。まだ、人間の概念では把握できません。ある気功師はこんなことを言いました。人の毛穴一つの中にも町があり、電車も走っていれば、車も走っている。それを聞いた人は誰でも不思議に思いました。しかしご承知のように物質は微粒子の状態において、分子、原子、陽子などがあり、とことんまで調べてみて、もし各層で一つ一つの点ではなく、その層の面を見ることができれば、例えば分子の層の面、原子の層の面、陽子の層の面、原子核の層の面を見ることができれば、違った空間の存在のあり方が見えるようになります。人間の身体も含め、あらゆる物質は、宇宙空間の空間次元と同時に存在し、互いに通じ合っています。現代の物理学は物質の微粒子を研究する時、ただ一つの微粒子を対象にして、それを分析して研究します。原子核を分裂させ、それから分裂後の成分を分析したりします。もし、なんらかの機器があって、ある次元におけるすべての原子成分または分子成分の全体的な現われを捉え、その光景を見ることができるとすれば、あなたはこの空間を突破し、他の空間の存在の真相が見えるようになるでしょう。人間の身体も外の空間と対応しており、すべてにこのような存在形式が存在しているのです・・・これが我々の先生の教えです。このような内容でお答えになりますか？)

「*****」賢→鷲山：「ありがとうございます。あなた方の教えが、大体掴めました。わたくしは現在日本で、人々の物質偏重の意識を改革するプロジェクトに取り組んでいます。わたくしのこの世界の捉え方は、

あなた方の捉え方と非常によく似ています。わたくしは、佛教や、道教といった宗教的な見方ではこの世界を捉えていません。この宇宙の根源は自分の意識に直結していて、自分の本体を認識し、そこに至ることができれば、この世界を自分の意識で動かすことができると考えています。この時空間は三次元の視点では存在しているように見えていますが、実際には存在しているのではなく、この自己の本体から映し出される世界が顕現する場として、表現されているだけだと見えています。でも、これはあくまで、私の捉え方ですので、あなた方の捉え方と合致しているかどうかは分かりません。私たちは最近日本で発生した失踪事件を通して、最近の時空の変化に気付きました。今が人々の意識を変えなくてはならない時期だと感じたのです。あなた方が先生にお会いになる機会がありましたら、是非、この時空の変化について聞いてみてください」

(*****) 男→鷲山：(分かりました。機会を見てあなたの考えを先生にお伝えします)

この質問を最後にして、賢たちは引き上げることにした。丸顔の男性が修法を教えてくれると言った。五人は修法を行っている人たちの居る部屋に入って行った。丸顔の男が、五つの気功の型を教えてくれた。心を整え、この型を毎日、練習することで功を積むことができると言った。賢たちが礼を言うと、丸顔の男が言った。

「*****) 男→鷲山：(差し支えなかったら、あなた方が、どういう次元にあるのか、何か具体的に示して頂けますか?)

賢は了解した。賢はテレポーションで外の車の中に移動してみせることにした。賢が瞑目すると、その姿が次第に薄れて行き、やがてその場から消えた。鷲山と、長谷部、小塚はあまりの驚きに、魂を抜かれたように呆然としてしまった。梓は平然としていた。丸顔の男の周りに、修法を行っていた者達が集まって来た。彼らの顔つきは真剣だったが、驚いて動揺しているようには見えなかった。1、2分すると、賢が再び戻って来た。賢は顕現すると、4、5秒経ってから言った。

「*****) 賢→鷲山：「当局の様な男達が4、5人来ています。この辺りの家を探っているようです。ここからは200メートルほど離れ

た場所に居ます。我々が後を追跡^{つけ}られたのでしょうか？」

丸顔の男が慌てずに言った。

「*****」男→鷲山：(大丈夫です。我々は地下道を通して逃げます。あなた方も捕まると厄介でしょうから、裏手から出てください。大きな通りに抜けられる小道があります。あなたはすばらしい功をお持ちですね。きっとどこかでお逢いできるでしょう)

修法を行っていた人たちは、皆隣の部屋に入って行き、そこから小さな木の箱を動かした。そこには地下に通じるトンネルが掘られていた。そこに居た人達が全員トンネルの中に這入ると木箱が内側から元に戻され、まるでそれまで誰も居なかったかのような雰囲気になった。賢たちは丸顔の男性の教えてくれた裏口から、静かに外に出た。そこは林の中を抜ける草ぼうぼうの小道に通じていた。10分ほど歩くと、丘の反対側に沿って走る大通りに出た。賢は透視でその道と、ここを訪れたときに通ってきた道の交差点を探した。1キロほど先に交差点があるのが分かった。賢は鷲山から車のキーを借りると、車の中に向けて再びテレポーションした。幸い、車の周囲には人の姿は無かった。賢はエンジンを掛けて車を発進させた。1キロ前で、先ほどの道に入ると、4人の居る場所まで走ってそこで鷲山と運転を交代した。

「やあ、驚いた。彼らはうまく逃れることができただろうか？」

賢は透視を試みた。先ほどの家の中に、5人の男達が入り込んであちこち調べていた。しかし、どうやら木箱の下の地下道には気付かないようで、男達はその部屋から出て行った。賢は丸顔の男達を透視してみた。彼らは、既にトンネルを出ていて、ライトバンの中に居た。どうやら2台の車に分乗しているようだった。賢はほっとした。

「大丈夫だ。全員無事なようだ。だけど、恐ろしい国だな。我々だって、もし連行されていたらどうなっていたか分からない。鷲山さん、この車もチェックされているかも知れないから、手を打たないとまずいでしょう」

「それは大丈夫です。この車はそのことも考えて、中国人の友人から借りました。彼は人民党の会員だから、追求されることはないでしょう。

僕の車はオイル交換と点検に出してあります。ところで、さっきのは一体何だったんですか？びっくりしました」

「あれは、テレポーションですよ。所在のはっきりしている場所には時空を切り替えて移動できるのです。彼らの先生もそれができると言うことを言っていましたね。だけど、あまりそれはやらない方がいいと・・・」

長谷部が言った。

「リーダー、リーダーが超能力を持っているという噂は本当だったんですね。本当に驚きました」

「このことは、他の人たちには言わないでください。混乱させてはいけないので」

男達はそれぞれ頷いた。

4人は途中で昼食を摂ることにした。北京に向かう田舎道にある小さな食堂で4人を降ろすと、鷲山は友達の家で車を返しに行くと言って立ち去った。4人はワンタン麺を食べた。油の中にワンタンが浮いているように感じたが、緊張からの解放もあって、皆とてもおいしく感じた。食べ終わって暫くすると、鷲山が自分の車で戻って来た。午後は大学病院で気功治療の見学を行うことになっていた。大学病院の駐車場に車を止めて5人が降りると、3人の男達が近づいて来て何か言った。鷲山が応えている。暫く会話していたが、やがて3人はそこから立ち去った。

「どうかしたのですか？」

「用件を聞かれて、それから、午前中は何処にいたか訊かれたんです。市内見物をしていたと言っておきました」

「凄く 심각한警戒だな？一体何なんだろう？」

「いいえ、いつものことですよ。気功に関することには異常すぎるくらい神経を使っていますからね」

「北京での気功の調査は、危険な選択だったかな？」

賢は独り言のように言った。

「今は気功関係の雑誌も、書籍も、完全に書店の棚から無くなりました。気功という言葉の口にする事すら憚られます。太極拳の様にスポーツ

の一種として形態を変えたものもありますが、それ以外の気功は元極功という医療気功以外は政府が一切許可していません。元極、分かりますか？道教のシンボルとして白黒の目玉が回転して合わさったような太極図という図があるでしょう、あれの中心にもう一つ円を加えたものが元極図ですが、元極功はそれをシンボルにしています。彼らは心身の調和と健康の維持という、現世的治療効果を前面に打ち出して、当局からの批判を受けない様になっているのでしょう。現在指導していることよりもっと深い奥義があるようですが、それは公開していません。ここであまり、立ち話をしていると、また当局に危ぶまれますから、早速病院の中に入って見ましょう」

4人は鷺山の後に附いて病院の受付に行った。鷺山が、アポイントメントの話をしている。受付の40歳くらいの眼鏡を掛けた女性は、首を横に振って、何か捲し立てている。少し離れたところで控えていた4人の所に戻って来ると、鷺山が言った。

「今日の公開医療は中止になったので、我々は病院に入れたいと言っています。どうしましょうか？」

「あまり、簡単に引き下がるのも不自然だから、もう一度交渉してもらえませんか？」

鷺山は了解して、再び受付の女性の所に行った。

「多分、上からの指示だろう。今度だめだったら引き返そう。その方が無難だ」

鷺山は先ほどの受付の女性とやり合っていたが、そのうち年配の男性が顔を出し、鷺山に何かを話した。女性は興奮していたが、年配の男性は平然とした様子である。鷺山は仕方なさそうに引き下がって来た。

「駄目ですね。諦めましょう。これ以上押すと、危険性が高まります」

5人は直ぐに車に戻った。鷺山は4人をホテルに送ると、「どこか見物に案内します」と言った。医療気功の現場を見せることができなかったことに、責任を感じているようだった。

「僕と、田辺さんは少し相談することがありますから、鷺山さん、長谷部君と小塚君をどこか、有名な場所に連れて行って頂けませんか？」

長谷部と小塚は自分たちが相談から外されたことにやや不満げだったが、直ぐに鷺山が説明を始めたいくつかの観光地の紹介に身体を乗り出した。ホテルに着くと賢と梓は車から降りた。翌朝、レストランで会うことを確認し、梓が全員に帰国のフライトについて説明すると、鷺山は長谷部達を乗せて発進した。賢と梓は一旦部屋に戻った。梓が直ぐに賢の部屋に来た。

「あなた、医療気功の見学は残念でしたね」

「いや、かえって見学しなくてよかったかも知れない」

「それは、どうしてですか？」

「中国の政府に真実を隠すベールを掛けられた医療などを見学しても、中国の気功について、かえって誤った判断をしてしまうからね」

「昨日、ネットで調べたら、ここでは公園で気功をする場合は関係機関に登録しなくてはならなくて、人数が多いときは警察の許可が必要なようです。団体に名称を付けるときは中国、アジア、世界、宇宙なんというスケールの大きな語を使ってはならないようです。組織を作る場合も広範囲な組織は認められないし、出版も許可なくはできないようです。気功の広告、宣伝、気功用品の販売は勿論禁止です。違反でもしよものなら、政府の監視下で裁判が行われて、最悪の場合、無期懲役や死刑にされる場合さえあるようです・・・この国には長く居たくないですね。あなた、午後は何か計画があるのでしょうか？」

「分かったか？」

「それは、分かります。また、どこかに連れて行ってくれるとか・・・」梓は賢の顔を覗き込むようにして言った。

「蓮花山に行こうかと思ってね」

「それはこの近くなんですか？」

「いや、分かるだろう。長谷部達を観光にやったのはそのためだよ。ずっと遠くだ。多分、泰山の倍ほども遠いだろう。蓮花山というのはパワー・スポットなんだ。中国政府が認定した場所で、病院や学校もあるようだよ。1999年に政府のファーリンゴンに対する弾圧が始まるまでは、中国、いや世界中から多くの人がここを訪れていたようだよ。ここ

に行く、普通の病気なら直ってしまう。気持ちも落ち着いてきて、運勢も好転すると云われているんだ。世界でもトップレベルのパワー・スポットらしいよ」

「中国にはそんな所があるのですね」

「うん、日本にもそういう場所があるらしい。霊的な出入り口ではなくて、大地とのエネルギー循環が起きやすい場所のようだよ。人間の身体は大地と同じだろう。そのエネルギーの出入り口というということは、自分自信のエネルギーの代謝ができる場所ということだよ。だから、当然肉体や精神に影響を与えるんだろうね。浄化作用もあるらしい」

「是非、一緒に連れて行ってください」

「うん、そのつもりだよ。だけど問題はその場所の特定だ。行ったこともなければ、どんな場所かも分からない」

「あなた、私の部屋に行きましょう。グローバル・アースで位置を検索しましょう。それからネットで蓮花山の写真などを調べて、特徴を確認したら如何ですか？」

「そうだ、それがいい」

ふたりはセカンドバッグを手にする、賢の部屋を出て、梓の部屋に向かった。梓の部屋は2つ上の階、8階だった。エレベータの前に来てボタンを押した。そのとき賢は背後に強い視線を感じ、戦慄を覚えた。3人の男達が立っていた。中の一人が話しかけてきた。

「*****」(警察のものです。どこから来たのですか?)

「*****」(日本です)

梓が応えた。3人は顔を見合わせた。最も若い男は露骨に嫌悪感を顔に顯した。最年長と思われる男が聴いた。

「*****」(パスポートを拝見できますか?)

ふたりはバッグから、パスポートを出して見せた。3人はパスポートを交互に廻して、チェックしていた。最年長の男が聴いた

「*****」(中国はどこに行きますか?)

「*****」(車で、北京近郊を廻るだけです)

「*****」(仕事ですか?)

「*****」(いいえ、観光です)

「*****」(他に同行者はいませんか?)

「*****」(2人います)

「*****」(その人達を連れて来てください)

「*****」(いま、観光に出掛けています)

「*****」(あなた方は、なぜ行かないのですか?)

「*****」(疲れたので、部屋で休んでいます)

警察官は執拗に質問を繰り返した。梓は必要最小限の応答をした。

3人は、梓に2つのパスポートを返してよこしてから言った。

「*****」(許可されていない場所には立ち入らないでください)

「*****」(分かりました)

3人は停止したエレベータに乗って去った。賢は再び昇りのボタンを押した。梓は賢の後から自分の部屋に入ると、ドアをロックした。

「あなた、危なかったですね。それにしても何をそんなに警戒しているのでしょうか」

「さあ、分からない。彼らだって、分かっていないんじゃないかな? トップの方針だから、従順に仕事をしているつもりなんだろう。誰かを探しているのかも知れないね」

梓は頷くと、直ぐにテーブルの上のパソコンをONし、地図検索を始めた。グローバル・アースは非常によくできたソフトで「中国 蓮花山」と入力するだけで一気に拡大表示された蓮花山周辺のマップを表示した。あの三国志の赤壁の戦いが行われた湖北省の長江の中流地域^{がくしゅう}、鄂州市にある洋瀾湖^{ようらんこ}の畔にあった。位置が特定できたのでネット検索で蓮花山を検索した。沢山の見出し表示があったが、中には元極と云う項目も出てきた。写真を開くと山というよりどちらかという小高い丘であった。掲載されている写真で風光明媚な場所であることが伺えた。説明書きにゼロ磁場という言葉が出ている。そこには「ただ磁場が良いだけでなく、その領域に建てた建物 — 元極堂(祈福堂)・元明塔・元極碑林など — の価値が計り知れず、修練や治療を考えた場合、最上の場所である」と説明されていた。

「よし、ここに行って、磁場を味わって、戻って来よう。梓、昨日と同じように僕にしがみ付いて・・・じゃあ、目を瞑って、移動するよ」
賢はくねった9匹の龍のモニュメントがある大きな格式のある門の内側に居た。モニュメントの象徴の様に上部に付いている蓮の花の図には、元極図のイメージがダブった。辺りにはあまり人影が無かった。賢はほっとした。

「どうやら、ここが蓮花山のような。身体の中をエネルギーが激しく流れているのが分かる。セドナと同じようだな」

「質問があります。どうして、あなたは目的の場所に直接来られるのですか？ 的を絞るときの誤差とかもあるでしょう？」

「梓、それは3次元的な見方だよ。瞬間移動するとき、その場所が特定できていたら、距離も、方向も意味が無くなるんだ。唯その場所、それがここなんだ。僕もやっとその感覚が掴めてきた」

「よく分からないけど、人間の意識って凄いですね」

「そうだよ。僕は自分が生まれたときに与えられた機能の内、まだ、ほんの僅かしか使ってない様に感じる。本当はもっといろいろなことができるような気がするんだ。そういう機能が働き始めてきているという感覚がある。昨日のように、あちこち見学してみよう。ここは広い場所のようだから、いつも僕の手をしっかりと握っているんだよ。建物なんかを次々に観て廻るから」

人影はちらほらとしか窺えない。ふたりは手前に見える『祈福堂』という建物の前に来た。WEBには元極堂という名称で紹介されていた建物だ。建物を建てた後、元極の師匠が弟子達と共にその場所で練功し、『通天貫地』という、天と地をつなぐ巨大なエネルギーの柱を立てたとWEBには載っていた。この場所は方位磁石を置くと、正しい方位を示さずにぐるぐる回ったりするとのことだった。ふたりはその中に入ってみた。正面に皆大歓喜という文字の書かれた碑が立っている。数人の人たちが床に座っていたので、それを真似て座ってみると、体が燃えるように熱くなり、手足が痺れ、賢は違う世界の映像を同時にいくつも見ている状態になった。その映像は、この世界のものとは異なった物質構造をして

いるように見えた。しかし、不思議と精神は安定していて、その無限に展開する映像を平常心で見つめていた。梓も意識がくるくる回転している自分に気付いた。ふたりは上の階を見てからそこを出た。外に出ても、まだ意識は拡大した状態のままだった。賢は梓の手を取って、『元明塔』に移動した。『元明塔』は、精神・肉体の本性を修練する場所として造られたとWEBに載っていた。11階建ての巨大な塔で、塔の中心を貫いている柱に、やはり通天貫地されていて、各階に修練段階の場を造っている。修行者は段階に応じて、順次上の階で修練していくことができるように造られていると説明されていた。地上階から順次昇り、各階で少しずつ意識を展開してみた。エネルギーが次第に強くなっていくのが分かる。賢は自分のあらゆるチャクラが全開したのを感じた。まるで滝のような勢いで、エネルギーが肉体と霊体の中を貫通してゆくのが分かる。ふたりは全く階段を上らずに、壁を抜け、各階を通り抜けて、最後に11階に到達したときは、天井に描かれた龍の像まで突き抜けて、屋根の上10メートルほどの所まで突き出されてしまった。そこから見る景色は絶景だった。ふたりは一旦地上に降りると、『元極碑林』と呼ばれる石碑を連ねた回廊を見学した。8本の渦巻き状に造られた回廊の両壁に、道教や仏教などの文化別に分けた見事な碑石が並べられている。ふたりはこの石碑を彫るのにどれほどの人々がどれほどの期間努力したのだろうかと思無量になった。WEBにあったように、この空間に居ると黙っていても体中の機能がONしてしまうようだった。賢は自分の見ている映像が、多次元の映像であることに気付いた。その映像は全て自分自身から映し出されたものだった。それが別次元の映像であることに気付いたのは、映像全体が全て光と音で出来ていると感じたためだった。梓は建物の中までも透視できるようで、突然の自分の能力の拡大に、混乱しているようだった。建物や記念碑を見学した後、周囲を回廊で囲われた大きな池に掛る『通天橋』と謂う急なアーチをした橋を渡って、蓮花山病院を訪れた。池の中には蓮の花や、魚のモニュメントが飾られていて、渡るだけで楽しくなる。橋を渡り切って少し歩くと、道の端の一角に蓮華山病院がひっそりと建っていた。賢たちが突然訪問したので

見学の許可が下りるまでに時間が掛かった。ふたりはそこで、じっと待っていた。そこは病院と謂うよりむしろ、アパートと謂った方が納得できる雰囲気建物だった。周囲の警戒は緩く、梓の片言の懇願で、内部を見学させて貰うことができた。働いている人たちは心優しい人ばかりのようである。先ず院内を見学した。手術の時の麻酔の作用は観ることができなかったが、脈拍を見て体の状態を判断する脈診、気功針と呼ばれる治療、特殊な丸薬を使った治療、デトックスという悪い気を除く施術、5臓への効能のある薬湯に入浴できる浴室、元極マッサージなどを見学させてもらった。いずれの施術者も非常に穏やかな人たちで、近くに居てもその波動の柔らかさが伝わってきた。最後に、この病院の専属教官が元極功法の理論の説明と、貫頂という気を体内に流入させる功法の実演をしてくれることになった。しかし、貫頂をしようとした教官の手が痺れて、賢に対しても、梓に対しても、手を近づけることができなかった。ふたりは、謝罪と礼を述べ、早々にその場を立ち去った。

「人の心を癒し、同時に人々の身体を癒す。これが本当の気功医療なんだろうな。尤も元極功を気功と呼ぶべきかどうかは疑問だけど」

梓は頷いた。

ふたりはホテルに戻ることにした。梓が賢にしっかりしがみ付くと、賢は一気に梓の部屋に戻った。

「はい、お疲れ様でした。凄い場所だったね。あれほどのエネルギーがあるとは、びっくりしたよ」

「あなた、本当に凄かったです。わたくし、狂ってしまうかと思いました。でもめちゃくちゃ楽しかった。ありがとうございました」

時間は午後5時を回っていた。長谷部の部屋に電話をしてみた。居ないようだ。ふたりはロビーに降りてみた。例の3人の警官が見張りでもしているのか、エントランスのガラスドアの外に立っていた。ふたりはレストランを覗いてしてみた。しかし、長谷部達の姿は見えなかった。少し早めだが、帰国の支度の時間を考えて、レストランで簡単に食事を済ますことにした。ふたりはナポリタン・スパゲティを食べた。それが一番早いと思った。食事を終えてレストランから出ると、エントランスの

外で長谷部と小塚、それに鷺山が3人の警官から尋問を受けている。何を話しているのか賢には分からない。梓が言った。

「わたし、聞こえます。全部は分かりませんが、鷺山さんが、今日の午前中は北京市内の景山公園に行っていたと言っています……警察が証拠を見せるように言っています」

賢は急いでフロントの横に行き、旅行案内の中から景山公園のパンフレットを取り、壁の影に回り込むと景山公園を強く意識した。直ぐに公園の前に出た。もう土産物店はほとんど閉まっている。公園の端に土産物のカートを引いている露店の女性がいた。片付けをしているようだ。賢は直ぐにその女性に近づくと、金属製のミニチュア建物の付いたキーホルダーを4つとピンク色のブローチを一つ買った。その内の一つをセカンドバッグのバンドに付け、残りをポケットに入れた。そしてまた木陰に移動し、直ぐにホテルの元居た場所にテレポーテーションした。梓は賢が居なくなったので探し回っていたが、賢は柱の陰から近づき、いきなり梓の手をとるとエントランスを通り抜けて外に出た。鷺山が3人の警察官に連行されそうになっていた。賢が警官に言った。

「さきほどはどうも。一体どうしたのですか？」

鷺山が言った。

「午前中何処に行っていたかと聞かれたので、景山公園に行っていたと言ったんです。でも信用してくれません。どうしたら……」

賢が警察官に向かって言った。

「我々は午前中、確かにそこにいました……そう、そのとき僕がまとめて買ったキーホルダー、渡すの忘れていました」

そう言うと、キーホルダーを3個出して鷺山に1つ渡し、警官に自分のバッグに付けたキーホルダーを見せた。賢の言葉は誰も通訳しなかったが、警官はキーホルダーを観ると、3人でなにやらこそこそ話し合い、軽く頷いてその場を引き上げて行った。真っ青だった鷺山の顔に次第に血の気が戻ってきた。長谷部も小塚もこわばっていた顔がほころんできた。梓は、「スーパーマンみたいな人だ」と思った。そしてふと、自分の聴力にも驚いた。賢は、長谷部と小塚にキーホルダーを一つずつ渡し

て言った。

「景山公園、なかなかよかったな」

ふたりはきよんととしていた。賢は、ポケットからブローチを取り出して、梓の左胸に着けた。梓はにっこり笑った。

翌朝、全員帰国の支度をしてロビーに集まっていた。フライトは10時40分発で、午後3時には成田に着く予定だった。

朝食は、賢と梓は一緒だったが、長谷部と小塚はずっと早くに済ませていた。賢たちがレストランに入るときに、食事を終えて出て来る長谷部達に出合った。梓は昨日の賢の強い腕の力を感じていた。身体を締め付けられる様な感覚が残っていて、身体が痺れているようだった。胸に附けたピンク色のブローチを意識しながら、「日本に帰ったらどうなるのだろうか？」と一瞬不安が頭をよぎった。「もう、あまりふたりきりの時間を取れなくなるかも知れない」梓は寂しくなって、賢の右手を握った。賢も軽く握り返した。変わり映えのしない食事だったが、梓はこの上なく美味しく感じた。

賢と梓がチェックアウトを済ましてロビーのソファで寛いでいると、チェックアウトを済ませた小塚が賢の所に来て言った。

「キーホルダー、ありがとうございます。昨日は午後、景山公園に行かれたのですか？」

「うん」

それは嘘ではなかった。長谷部が言った。

「我々は景山公園をサッと見学してから隣にある故宫博物館にも行ったのです。だから、時間的なつじつまさえ合えば、何等問題なかったのですが。まさかリーダーがあそこに行っていたとは知りませんでした。助かりました。それからキーホルダー、ありがとうございます」

「うん、鷲山さんが連行されなくてよかったな」

梓は黙っていた。やがて鷲山がやって来た。

「おはようございます。チェックアウトは・・・されたようですね。時間がありますが、早く搭乗手続きを済ませた方がいいでしょう。準備がよければ出掛けましょうか？」

男達はライトバンにスーツケースを積み込んだ。4人分のスーツケースを積むのは骨が折れた。北京に着いたときにはそれほど感じなかった荷物が、厭に重く感じられる。全員が乗り込むと、鷺山は空港に向けて出発した。小塚が言った。

「長い出張でしたね。いろいろ勉強になりました」

「まだ終わってないのよ。自分の家に着くまでは出張中だから、そのつもりで行動しなくてははいけないわよ」

「済みませんでした。気持ちを引き締めます」

北京空港には、沢山の警察官が居て、明らかに特別警戒体制を敷いているのが分かった。受付カウンターには長い列が出来ていた。ビジネスクラスでもチェックインが終わるまでに1時間掛かった。手荷物検査も厳重だった。ボディチェックは必要以上に丁寧に行われ、手荷物の中身も全部チェックされた。出国審査も厳重だった。警戒態勢は入国したときより一層に厳しくなっていた。指紋と虹彩の確認だけでなく、人相の確認もしているようだった。パスポートの記録も徹底的に調べられた。出国審査が終わったのは出発の30分前で、通常なら搭乗が開始されている時間だった。いろいろな放送がけたたましく響いている。電光掲示板で確認すると、フライトは1時間遅れで出発することになっていた。賢と梓は免税店を廻って、愛子と原に土産を買った。それ以外の者には土産を買うのは止めた。梓は両親と会社の仲間などに菓子や小物を買った。長谷部と小塚は2人であちこち廻って歩いているようだった。ゲートに戻って来たときには2人は両手に土産物の袋を一杯下げていた。ゲートの待合室にテレビがあった。大勢の人々がテレビの前に集まって画面に見入っている。チベットと上海で爆発があったとニュースが伝えていた。大勢の負傷者が出たとキャスターが説明している。中国語の分かる日本人の乗客がニュースの解説を聞いて、周りの日本人に説明していた。どうやらいくつかの国で声明文が発表されているとのことだった。しかし、中国当局の検閲が入っているらしく、ニュースの最後に「この爆破は邪教集団あるいはチベット密教集団が仕組んだテロで、我が政府はこのような暴挙を許すわけにはいかない」という解説を付け加えていた。賢は、

何時までも国民に対する姿勢を変えない中人（中国国民党）に幻滅と嘔吐を覚えた。しかし、そのように反応する自分にも、違和感を覚えていた。人々のざわめきにかき消される中で、搭乗手続き開始のアナウンスがあった。機内に入るとやっと生きた心地がしてきた。賢と梓の席は隣り合っていたが、長谷部と小塚は3列離れた後方の席だった。フライトはユナイテッドを選んだので、賢と梓は一息付けた。先ずシャンパンが配られた。離陸すると直ぐにオードブルが出された。長谷部と小塚はワインを頼んで、直ぐに飲み始めた。皆やっと寛ぐことができた。しかし、賢の頭には苦難の前途のイメージが展開されてきて、それを見つめながら飲むシャンパンは、いつもより酸っぱく感じられた。梓は一口のシャンパンで夢心地になってしまった。賢は座席のテレビでニュースを観た。UNNのニュースだった。これで嘘偽りの無い事実を知ることができると思った。ニュースでは先ほど観た爆破をありのままに伝えていた。チベットの中国新疆ウイグル自治区にある人民党の事務所に向けてロケット弾が打ち込まれ、建物が全壊した。上海でも人民党の支部ビルが砲撃で半壊していた。犯行声明は、中国解放戦線という新しく耳にする集団から、国連本部、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、日本、カナダ、イタリア政府に同時に送りつけられたもので、「我々は中人のジェノサイド政権を打倒する為に蜂起した。我々は中人が完全に崩壊するまで、決死の覚悟で戦い抜く。先進各国が我々を支援してくれるものと期待する」という内容だった。賢は激しい感情の荒らしをニュースの画面から感じ取っていた。梓はうとうととしていて、税関申告書も受け取らなかった。賢がサインの箇所を残して、梓の分まで記入した。成田に着くと、荷物は直ぐに出て来た。荷物を台車に乗せて税関を抜けると、賢は深呼吸をして出口のドアを押した。梓が賢の後ろに従うようにEXITから出て来ると、果たして登喜子と愛子、原、そして小塚と長谷部の両親の姿があった。

キガリ（クツ族の族長の家）

祐子は事務所の建設から取り掛かることにした。鹿島はムーンバックス本社から、新組織の資金の45パーセントを無条件で出資する約束を取り付けた。事務所はバラックの家の敷地から100メートルほど離れた空き地を確保し、そこに新築することとした。その土地の周囲を敵からの攻撃を受けないように3メートルのブロック塀で囲み、鉄条網を張り巡らせた。敷地内に従業員の宿舎も用意した。まだ資金は当初の計画の1/3ほどしか調達できていなかったが、半月後にはキガリの役所の認可を得て、操業を開始した。機関の名称は長老達の意見を取り入れHURUMA Kampuni（フルマ・カンプリニ＝慈悲の会社）と命名した。およそ1ヵ月後にはフルマは活動を開始していた。祐子はいよいよ重大な決断をする段階に至ったと考えた。ここからが自分の存在の意味が問われる段階だと考えた。祐子はその日の夕食を亜希子と共にした。亜希子は祐子に会うのを、首を長くして待っていた。祐子はどんなに忙しくても、週に1度は必ず亜希子と会うことにしてあったが、この日は特別であった。祐子は亜希子に会うのもこれが最後になるかもしれないと思っていた。

「お姉様、今日はどうされたのですか？」

「何か変かしら？」

「いいえ、でも、凄くシリアスな顔をされておられますわ」

「あらそう、ごめんなさいね。すこし忙しかったからね」

亜希子の嬉しそうな顔を見ると、祐子は腹の底から、震えるような悲しみが込み上げてきたが、それをぐっと飲み込んだ。

翌朝、祐子はサスカブを乗せてクツ族の居住区の中心地域に向かっていた。既にクツ族の首長と会う約束をしてある。祐子が電話で「会って話したい」と申し出たのに対して、首長は最初「話すことは何も無い」とすげなく拒絶した。祐子は「両種族の未来に附いて話し合いたい」と言った。一呼吸置いて、首長は了承した。しかし、自分の住居に向いて来ることと、護衛は一人だけという条件を与えられた。祐子は両者の

安全のために街中のホテルで会うことを強く提案したが、クツ族の族長は「それなら、会えない」素気なく言った。祐子はやむなく族長の住まいでの会合を了承した。今、そのクツ族の族長が居住している場所に向かっている。祐子とサスカブはサバイバルジャケットを着ている。キャンプを出るとき祐子は小銃を両方の腰に下げ、サスカブは機関銃を肩に掛けて出た。車はサスカブの道案内で、森のような木々に囲まれた道を進んだ。視界が開け、突然5階建てのビルが目の前に現れた。祐子は雨避けのあるエントランスの前に車を止めさせた。車を降りようとして、周囲の異様な雰囲気を感じ取った。サスカブもその雰囲気を感じ取ったようだった。機関銃を両手で支えるように持ちあげると、臨戦態勢をとった。祐子が目を凝らしてみると、5階建ての建物の2階の窓が4箇所半開きになっていて、そこに人影が見える。明らかに銃を構えているのが分かる。祐子は言った。

「*****」(動じては駄目よ。何があっても動いては駄目、堂々としていなさい。わたしに附いて来るのよ)

祐子は車を降りた。サスカブも両手で機関銃を抱え、祐子に言われたようにゆっくりと車から降りた。ふたりが入り口に向かおうとしたとき、パンパンパンといきなり銃の発砲の音がした。祐子は立ち止まらずに堂々と入り口に向かった。サスカブも少し身構える体を取ったが、祐子が何事もなかったかの如く進んでゆくの、そのまま祐子の後に従った。入り口の扉には呼び出し用のリングが取り付けられている。祐子はリングを上げて、扉をゆっくり2回打った。一呼吸置いて、一人の仁王のような頑強な体格の男が顔を出した。その横にもう一人少し小柄だが、しかし同じように頑強そうな体格の男が立っていた。ふたりとも髪は剃りあげてあり、頭頂が黒光りしている。

「*****」(どちら様ですか?)

祐子は、身体を動かさずにゆっくり応えた。

「*****」(プチの首長、ユウコです)

「*****」(首長がお待ちしております。さあ、どうぞ・・・その前に、武器をお預かりしたいのですが・・・)

祐子はサスカブに目配せし、軽く頷いてから自分の小銃を腰から外して男に渡した。サスカブも機関銃を渡した。男は少しも重そうな様子を見せず、さも軽そうにそれらを取り上げて、横にいる男に渡した。横に居た男は小銃と機関銃を同時に渡されて少しよろけた。銃を受け取った男をその場に残して、仁王のような男が先に立って奥に進んで行った。ふたりは突き当たりの部屋の前まで連れて行かれた。仁王のような男はサスカブにその位置に留まって待つように言った。祐子はサスカブに向かって頷いて見せた。サスカブと仁王をその場に残して、祐子は扉を開けた。部屋の中が一望の元に伺えた。突き当たりの奥に大きな両肘のデスクがあり、そこに一人の老人が座っている。老人は立ち上がると、右手を差し出して、横にあるソファーに腰掛けるように祐子を促した。祐子は半身になって扉を閉め、案内されたソファーの近くに行った。老人も机から離れて、祐子の近くに來た。

「*****」(さあ、掛けてください)

「*****」(失礼します)

老人が言った。

「*****」(家の者が、失礼をしたようで、申し訳ありません。機関銃を見たので、敵の襲撃と勘違いしたようです。わたしがクツの族長グルワクです)

「*****」(いいえ、お気になさらないでください。失礼とは思いましたが、道中の安全の為に、武装してまいりました。わたしはブチの族長ユウコです)

ほんの少し老人の顔にはほころびの色が伺えた。

「*****」(単刀直入にお聞きしますが、どういうご用件でしょうか?)

祐子は漸く、目的の地点に到達したことで、ほっと胸を撫で下ろした。落ち着いてゆっくり話し始めた。

「*****」(過去に、二つの種族の間に不幸があり、今でも、その頃の憎しみの意識が残っている人たちが沢山居ます。政府が種族間の憎しみを払拭し、平和に生きることを推進していますが、平和への道が遠

いと考えているものたちが多すぎます。わたしは族長と、今後お互いの間に戦いを起こさないという約束を取り交わしたくて参りました。わたしは、憎しみの生まれる一番の原因は、人々の貧困にあるのだと考えています。それで、一大決心をしました。ブチ族の中に人々が生きられるように、一人一人が協力し合う組織を作ることになりました。そして、今後クツ族の方たちと一切戦いを行わないようにすると決めたのです。それで、族長にご協力を頂きたいと思ひまして参上しました)

グルワクは真剣な眼差しで祐子を見つめていたが、ゆっくりと口を開いた。

「*****」(あなたは、ブチ族の出身じゃないように見えますが、どうして、ブチ族の為に自分の身の危険も顧みずに、このような無謀なことをするのですか？まだ小競り合いの状態が続いている中で)

「*****」(わたしは、人間は皆繋がっていてもともと意識の奥底では、国や種族が違って相手に対して優しい心を持っていると思っています。戦いを続けているほとんどの人たちも、これまでの流れの中で、自分の意思とは関係なくほかの組織の意志によって突き動かされて行動しているのだと思っています。妻を守るため、家族を守るためにやむを得ずに戦っているのだと思っています。本当は戦いの無い、平和な社会を望んでいるのだと思います。わたしは族長として、当然の行動を行っているつもりです。種族の人々が平和に生きられるように、できる限りのことをするつもりです。わたしは日本から来ました。ここで今もまだ続いている戦いを終わらせたいのです。ルワンダにはいろいろな優れた農産物があります。美しい工芸品もあります。まだ発見されていない鉱物もあるかもしれません。この国が豊かでなくて、アフリカの何処の国が豊かになれるのでしょうか？)

グルワクは黙って聞いていたが、軽く頷いて言った。

「*****」(族長、あなたの話は分かりました。しかし、我々はまだ、ブチ族の人たちをすんなり受け入れることに抵抗を感じています。どうでしょう。暫くの間、ここに逗留して頂く訳にはいきませんか？様子を見てみましょう。あなたの言っていることが真実であれば、ブチか

らの攻撃は起きないはずです。これまで1ヶ月に少なくとも1、2回の小競り合いや、悲しい殺戮がありました。つい先日も我々の中の血の気の多い若者達が、あなた方を襲撃して大勢の人たちの命を奪いました。攻撃した者達も、3人しか生き残りませんでした。馬鹿なことです。分かりました、様子を見てみましょう。もしあなたが、両方の部族の血気盛んな者たちの心を静めることができるのでしたら、わたしはあなたの提案に全面的に従います。わたしにはそれができませんでしたから・・・しかし、もしそれがあなたにもできないのでしたら、やはり我々は自分達を守るための武装を続けなくてはならないと思っています。あなたが戻らないと知ると、ブチの人たちは血相を変えるでしょう。そのとき冷静を保てるかどうか、是非拝見させて頂きたい)

「*****」(わたしは、ブチの人たちにクツの族長と話合うとしか言って来ていません。彼らがいきり立つことは目に見えています。わざわざそのような、不可避の状態を作り出すことは、わたしの望むところではありません)

「*****」(それでは、この話は無かったことにしてお引取りください)

「*****」(いいえ、それはできません・・・いいでしょう。わたしは暫くの間、あなたの疑念が晴れるまで、ここに逗留させていただきます。その代わり、わたしの部下のサスカブは帰してください。彼に伝言を託します。今族長がおっしゃったことを、文面で伝えるようにします。その文面は族長にもお見せしましょう)

「*****」(了解しました。ではそうしましょう。早速部下を呼びます)

祐子はグルワクから1枚の紙とボールペンを借りて手紙を書いた。

「*****」(各長老の皆さん、わたしはクツの長老の家に暫くとどまることになりました。わたしがここに居る間、二つの部族間に戦闘行為が無ければ、クツとの和平を取り交わすことができ、わたしは戻ることができます。ですから、是非わたしが留守の間、部族を平穏な状態に保ち、血気盛んな者たちを鎮めてください。 ユウコ)

先ほどの仁王が呼ばれて、グルワクの指示を聞いていた。仁王は一旦部屋を出ると、直ぐにサスカブを連れて戻って来た。祐子はサスカブに事の次第を説明した。サスカブは直ぐには納得しなかった。祐子は「*****」(わたしのことは大丈夫だから、このことをブチの人たちに伝えて欲しい)

と言った。何度も説得して、サスカブは漸く祐子を受け入れた。祐子はサスカブに手紙を渡した。先ほど預けた機関銃は弾丸を全部抜かれた状態で返された。これから弾丸は必要なくなるだろうとグルワクが言った。しかし、サスカブは納得しなかった。弾丸が高価なものだと言って食い下がった。グルワクは弾丸を空瓶に入れ、封印して持ってくるように部下に命じた。暫くして部下は透明なガラスのビンに数十個の弾丸を入れて持って来た。ビンはテープで何重にも封印されていた。サスカブは不満そうだったが、そのビンと機関銃を持って出て行った。祐子は外までサスカブを見送りに出た。サスカブは運転席に乗った後も、後ろ髪を引かれてでもいるかのように何度も、何度も祐子を振り返り、ゆっくり車を進めて帰って行った。祐子には客間のような部屋が宛がわれた。その部屋にはシャワーもトイレも無かった。グルワクはトイレとシャワーの場所を説明し、

「*****」(シャワーは、夜9時以降は誰も使わないから、安心して使ってください。それから、食事は自分達と一緒に食べて欲しい)と言った。チェストに着替えを一揃え用意してあった。祐子はグルワクが初めから、祐子をここに逗留させるつもりであったことを知った。グルワクは、

「*****」(この森はクツ族の私有地なので、安全です。昼間はその中で自由に散策してもけっこうです。ただ、外に出るときは必ず護衛を一人附けます)

と言った。祐子は護衛でなく監視だと思った。

サスカブは危険を感じていた。祐子の逗留は畏だと思った。しかし、あの場で抵抗したら祐子も自分も命を落とす羽目になることは明白だった。キャンプに戻ってから長老達に連絡し、対策を講じようと考えた。

暫く走ってゆくと、サスカブは後方からジープのような車が数台追跡^{つげ}て来ていることに気付いた。サスカブはアクセルを吹かした。後を追跡^{つげ}て来るジープの車影が消えた。かなり離れたと思った。サスカブは少し横道に入り、メイン道路から見えない位置に車を止めると、路肩の石でビンを割り、弾丸を取り出し機関銃の信管を抜いて、急いで弾丸を詰め込んだ。ふと気付くと、メイン道路を3台のジープ型の車が走り去って行った。武装している男達の姿が目飛び込んできた。サスカブは「やはり、罠だった」と思った。作戦を考えることにした。「このまま真っ直ぐに帰ると、途中でやつらに出くわす。多分銃撃戦になる」サスカブは自分が不利な立場になることを予見した。逆に待ち伏せようと考えた。しかし、こちらから仕掛けては、祐子の努力が水泡に帰する。暫し考えて、逆に罠を張ろうと思いついた。

「罠には罠をだ！」

サスカブは呟いた。既に陽も傾いて来ていた。サスカブはサバイバルナイフで草むらに入り周囲の草を刈り取った。沢山刈り取って、自分の体型に合った形になるように束ねた。サスカブは近くの地形を確認した。少し先に岩山がある、そこに身を潜めてやつらを待とうと思った。車を本道に戻し、岩山の近くまで運転して行った。そこに車のエンジンをかけてスモールランプを点灯させたまま停車し、草人形を運転席に置いた。それから急いで機関銃を手にして、岩山に駆け上がった。機関銃を岩の上に据えて狙いを定めた。岩山から正道までは50メートルほどしか離れていない。サスカブが身を潜めてから10分ほどして、先ほど追い越して行った3台の車が戻って来た。案の定、サスカブの車を見つけると同時に車に向けて発砲してきた。激しく狙撃をしている。敵を十分引き寄せ、3台の車がスピードを落とし、あと50メートルほどの位置に近づいたとき、サスカブは機関銃で3台の車の男達を狙い撃ちした。一人だけ残して全ての男達を撃ちぬいた。男達は全部で12人居たが、2台の車は横転し、噴煙を上げた。残した一人は車を疾駆させて逃げ帰って行った。サスカブの運転していた車はガラスが粉々に割れ、無残な姿になっていた。しかし、撃たれたのは草人形だったので、幸いエンジン

はかかったままだった。サスカブは急いでキャンプに戻る道を走った。それからは追跡される気配は無かった。キャンプではママの帰りが遅いので、大勢の者達が外に出て待っていた。兵士は完全武装して、配置に着いていた。狙撃を受けたサスカブの車が戻って来たのを観ると、看護婦達が駆け寄ってきてその場に泣き崩れた。窓は全て吹き飛んで、車体にも無数の弾痕がある。ママの姿は無かった。ママが殺されてしまったと早とちりしたのだ。サスカブは集まった者たちに建物の中に入るように促してから、看護婦室で事の次第を一部始終説明した。心配して集まって来ていた長老達にユウコから預かった手紙を渡した。長老の一人が声を出して文面を読み上げた。長老たちは口々に、

「*****」(やはり、そんなに甘くなかった)

と言った。それから、緊急会議が開かれた。兵士の代表が、襲撃を受ける前に直ぐに反撃に出ると言った。しかし今回の祐子の行動に一番反対していた長老が言った。

「*****」(やつらは、襲撃して来ることはできない。約束を破ったのはやつらの方だ。もし襲撃して来るようだったら、そのときは命を張って敵を殲滅する。やつらがそれ程の非人間的な者の集まりだったら存在する意味も無い)

いきり立った者たちの興奮を抑止しようとして話し始めた長老の言葉は、次第に語気が荒くなり、激しい憤りを伴って、そこに居る者たちの胸に突き刺さった。全員が言葉を失った。

祐子はグルワクの家族と初めて夕食を共にした。グルワクの家族は70歳を過ぎている妻のビルビティ、50歳くらいになる長男のミグザワク、45歳くらいの妹のエラムニイ、そして40歳くらいの次男のドンブロイの5人だった。いずれも独身だった。長男と長女は一度結婚していたが、ジェノサイドのときに相手を失ったと紹介された。離婚なのか、死別なのかは説明が無かった。ドンブロイはまだ結婚相手が見つからないと言っていた。祐子は「自分は日本人で、両親は自分が赤子のときに他界した」と言った。「このアフリカには、天国を作るために来た」と言った。そんな自己紹介の仕方をした自分が奇妙に思えた。グルワクの家

族は皆、口元に半ば嘲笑と分かるような薄笑いを浮かべた。宿敵であったブチの族長との同席であり、初めての日ということもあって、自己紹介の後は皆、言葉少なく食事をした。食事が終わる頃、入り口のドア付近で何かぶつかるとような大きな物音がした。妻のビルビティが入り口まで行き、覗き窓から外の様子を伺って突然大きな声を上げた。

「*****」(あなた、大変です)

祐子をひとりテーブルに残し、家族全員が走るようにしてドアのところに駆け寄ると、ミグザワクが扉を開けた。一人の傷だらけの兵士が2人の兵士に抱えられるようにして立っていた。

「*****」(どうした、何があった?)

「*****」(・・・や、やられました)

両脇に居る兵士が同時に応えた。

「*****」(なに? 一体誰にやられたんだ)

グルワクが怒鳴った。

「*****」(誰が、誰にやられたんだ、ナミクお前一人がやられたのか?)

「*****」(いいえ、ナミク以外は全員やられました。我々2人はここを守っていました。)

「*****」(何を言っているんだ。誰が襲撃して来たんだ?)

ナミクが血だらけな顔を少し上げて、口を開いた。

「*****」(わ、罠に嵌りました・・・やったと思ったんですが・・・つつ、次の瞬間、反撃を受けて、ぼっ、僕以外全員死にました)

「*****」(言っていることが分からん。何故、何処を攻撃したんだ。誰が攻撃しろと言った?)

「*****」(・・・・・・・・)

兵士達は黙して話さない。グルワクはキツとなって振り返り、ドンブロイに向かって言った。

「*****」(ドン、またお前か?)

「*****」(パパ、あいつはブチの兵士です。生かしておいたら危険だから、追わせました。やはりあいつは、危ない奴だったんです。僕

の感が当たりました！)

グルワクはドンブロイの顔を思い切り平手打ちした。

「*****」(ばか者！この前、あれほど言っただろう！まだ分からないのか!? お前の馬鹿さ加減が、あんな事件を引き起こしてしまったことを、もう忘れたのか!?)

「*****」(パパ、パパが言ったでしょう、ブチは人間じゃないって!)

ドンブロイは半分ベそをかきながら言った。

「*****」(政府の方針を出しているだろう、種族間で争ってはいけないって。これからはルワンダという国を良くする為に努めろって。お前はまだ分からないのか!)

「*****」(だけど、パパは言った、ブチは・・)

その言葉を遮るようにグルワクが言った。

「*****」(今は変わったんだ！ブチも人間だ、人間になったんだ！) 祐子はその会話を食卓に着いたまま黙って聞いていた。この家に居た兵士達が、サスカブを追跡して攻撃を仕掛けたようだった。その結果、サスカブが彼らを返り討ちにしたのだと分かった。祐子は憎しみあい、殺し合う者たちを哀れに思った。悲しくて涙が流れた。悲しみは次第に大きくなっていった。祐子は我慢できなくなって泣き出した。

「うわーん、あーん、あーん・・・・・・・・・・」

グルワクの家族は何事が起きたのかと、祐子の方を振り向いたが、長男のミグザワクはそれには構わず、2人の兵士に支えられ身体がだらりとしているナミクの脇に手を差し入れて、抱き起こした。ナミクはミグザワクに身体を預けるように凭れ掛かった。一人の兵士が一步退いた。ミグザワクはナミクに何か語り掛けながら、階段の左奥の部屋に連れて行った。2人の兵士もナミクに手を添え、支えるようにして附いて行った。グルワクは食卓に戻って来ると祐子に向かって言った。

「*****」(申し訳ない。うちの馬鹿息子があなたの部下を追い駆けさせたようなのです。初めにこちらから攻撃を仕掛けたようです。悲しませてしまいましたが、あなたの部下は無事のようなのです。もう信用で

きないと思うでしょうけど、2度とこのような不祥事を起こすようなことはさせません。どうか私どもの不行き届きをお許し頂きたい)

「*****」(わたしは、お互いに助け合わなければいけない人たちが、憎みあい、殺しあうのを見て、悲しくて、悲しくて、やりきれなくなったのです。わたしこそ大きな声で泣いたりして失礼しました)

グルワクは決まり悪そうにして、家族の居る入り口に戻って行った。ナミクを置いて来た長男のミグザワクの姿を観ると、グルワクはドンブロイと一人の兵士を連れて現場まで行き、銃撃を受けた兵士達の確認をして来るように命じた。護衛の為に一人だけ兵士を置いて行くように言った。それ以外には兵士は一人も残って居ないようだった。妻のビルビティは娘のエラムニイに兵士の様子を見て来るように言い付けた。護衛のために残った兵士は散弾銃を手にして外に出て行った。妻のビルビティは食卓に戻って来て、夕食の後片付けを始めた。祐子の方に視線を向けずに食器を片付けながら、口の中でぼそぼそと言った。

「*****」(災いが、舞い込んで来たようだ)

祐子は礼を言ってその場を辞すと、グルワクに言われた部屋に向かった。その日はシャワーも浴びずに、そのままベッドに潜り込んだ。悲しみが込み上げてきた。祐子は声を忍ばせて泣いた。翌朝は娘のエラムニイが祐子の部屋に、朝食の支度ができたことを知らせに来た。食卓にはグルワクと妻の2人だけが席に着いていた。祐子は2人に挨拶をした。娘のエラムニイと祐子が席に着くと、グルワクの合図で食事が始まった。互いに一言も話さない。3分ほどしてグルワクが口を開いた。

「*****」(昨日は、ミグとドンが全ての遺体を収容して来た。朝までかかった。これから彼らの家族に連絡する。それから、合同葬儀だ。こんなことが、何時まで繰り返されるのだ)

「*****」(悲しみの心から、恨みの心を生み出してはいけません。辛くても、これで終わりにしなくてははいけません)

祐子が言った。妻のビルビティが祐子を睨みつけるように見た。

「*****」(あなたが来るまでは、ここは平和だったわ) 祐子は言葉を変さなかった。グルワクが言った。

「*****」(族長がクツの族長の所に行って帰って来ない。護衛に附いて行った兵士が帰りに襲撃を受けた。これでブチの者が黙っていると思うか？たとえ護衛の兵士が何事もなく帰って来たとしても、黙っていないだろうに)

「*****」(あなた、それじゃあブチが襲って来るとおっしゃるのですか？)

「*****」(見ていれば分かる。だからと言って手をこまねいて待っている訳にはいかない)

祐子が漸く口を開いた

「*****」(もし、彼らが襲撃してきたら、わたしを盾にしてください。わたしが彼らを止めます)

グルワクの予想したとおり、やはり昼ごろになってブチの一団がやって来た。祐子は与えられた部屋に居た。エラムニイが、食卓のある部屋に来るように伝えに来た。祐子は直ぐに状況を把握した。食卓の椅子にグルワクが座っている。

「*****」(族長、ブチの一団が門を通り抜け、この家の見えるところまで来て、そこに留まっています。大勢居ます。伝令が一人でやって来て言いました。「直ちにわれわれの首長を帰してくれ、さもなければ我々は力づくで、首長を取り戻す」と。族長、2階に上がって、ベランダから彼らに話してください)

祐子はグルワクの言葉に頷き、後に附いて階段を上った。グルワクと一緒に突き当たりの、がらんとして何も無い部屋に入った。グルワクは、祐子に一人でその部屋を抜けてベランダに出るように言った。グルワクを部屋に残して、祐子はベランダの中央に立った。庭のように広がる森を見つめて驚いた。1000人ほどのブチの兵士達が100人位ずつの小隊に分かれて森の中に陣取っていた。兵士は皆、武器を手になっている。祐子は周囲の雰囲気から戦慄を覚えた。この建物の中にも恐ろしいほどの殺気が漲っている。左右の部屋の中に大勢の兵士が潜んでいるのが分かった。グルワクは部屋の中から言った。

「*****」(族長、さあ、彼らに話しをしてください)

祐子は静かに目を瞑った。美しい天空が見えた。ここは無限に広がる花畑だった。祐子は大きく息を吸って、両手を広げ、目を開いた。遙か彼方に一人の男性の姿が見えた。それが賢であることが直ぐに分かった。祐子は駆け出した。賢もこちらに向かって駆けてくる。祐子は賢の胸に飛び込んだ。ふたりはじっと抱き合ったまま、その場に佇んでいた。そこは美しい、豊かな自然に包まれた空間だった。祐子は意識をベランダに戻し目を開けた。そして、ゆっくり話し始めた。

「*****」(わが、愛する人々よ、クツの人々よ、ブチの人々よ、互いに助け合い、信じ合い、手を携えて、生きて行くときが来ました。わたくしたちは、元は一つです。同じように空気を吸い、同じように物を食べ、同じように血が流れている人間です。何の違いもありません。わたくしたちは愛し合い、睦み合うためにこの世に生まれてきました。あなたの心を、優しさで満たしてください。どうして、両親を憎めますか、どうして、兄弟を憎めますか？どうして隣に住む人を憎めますか？どうして、同じときに生まれてきた、友を憎めますか？みな、愛しい人たちです。これまでの間違いは忘れなさい。さあ、クツもブチも武器を捨てなさい。これからはともに豊かな社会を作るために生きるのです。さあ、ごらんなさい、あの太陽がわたくし達を祝福し、このルワンダを愛の光で満たしています。さあごらんなさい。いまから、わたくしたちは一つです。お互いに助け合って生きてゆきます。さあ、ごらんなさい・・・「神よ、ルワンダに幸福を与えたまえ、ルワンダに繁栄を与えたまえ、全ての人たちに愛を与えたまえ」・・・ありがとうございます)真上に輝いている太陽がくるくると回るように見え始めた。天空が薄いベールのようなもので覆われ、そのベールがうねるように波打って7色に輝いた。その真ん中から一条の光が差し込め、祐子を包んだ。祐子の身体は光に吸い上げられるように、空中に浮いた。その場に居た全ての者がそのような場面を見た。そしてその場に居る全ての者達の耳の奥に祐子の声が響いた。

「*****」(さあ、武器を捨てて、ルワンダを天国にするために働くのです。あなた方は一つになって、生きてゆくのです)

庭に陣取っていたブチの兵士達は次々に武器を捨てた。神々しい祐子の姿に、兵士達はひれ伏し、涙を流した。建物の中に居たクツの兵士達も全て武器を投げ出し、その場に膝を突き、両手を組んで祈りを捧げた。2分ほどすると祐子はベランダに戻っていた。光のベールは無くなり、辺り一面に光のダストが降り注いだ。それは見事な光景だった。グルワクは部屋の中央でひれ伏し、わなわなと震えた。

「*****」(神様のご降臨だ。私たちはなんと馬鹿なことをしていたのだろう)

祐子はにっこり微笑むと、振り返って、空洞の部屋に戻りグルワクに言った。

「*****」(わたしは、みんなと一緒に帰ります。キャンプに居る病人の手当てをしなくてはなりません)

グルワクは両膝を床に着け、下を向いて言った。

「*****」(はい、わかりました。お越し頂いて、ありがとうございます)

祐子は階段を下り、入り口の部屋を通り貫け、ドアを開けた。そこにはあの長老ボドルビとサスカブが土下座していた。祐子はボドルビの右手を取って、立ち上がらせた。

「*****」(長老、ありがとう。一緒に帰りましょう。サスカブありがとう)

その時、左手から長男のミグザワクが駆けて来て、祐子の前に跪いて言った。

「*****」(女神様、昨日銃撃を受けたものが全て生き返りました。昨日は確かに死んでいました。それが、丁度あなた様の御姿を拝見しているときに、駆けつけていた家族の者達の目の前で、次々に息を吹き返しました。弾丸が急所を外れていたのです。昨日は皆致命傷を受けているように見えたが・・・女神様の御力です。でも傷は決して浅くありませんから、これから病院に急送いたします。ありがとうございます)

「*****」(それはよかったですね。もう戦うのは終わりです。傷

も直ぐに癒えるでしょう)

ミグザワクは涙を目に溜めて、祐子の靴先に口付けをした。祐子は停めである車まで歩いた。兵士達が地にひれ伏している。泣いている者もあった。祐子は兵士達に振り向いて言った。

「*****」(私は何もしていません。全て、神様がなされたことです。これからクツの人たちと、手に手を取り合って、ルワンダの発展の為に努力してください)

祐子を乗せた車は1000人の兵士達の車を連れてキャンプに戻った。サスカブがキャンプの前に車を止めると、看護婦や、護衛をしていた兵士達が一斉に駆け寄って来て取り囲んだ。

「*****」(ママ、ご無事で何よりでした)

「*****」(みんな、心配してくれてありがとう。全てうまくゆきました)

祐子が無事であったことを知ると、看護婦達は涙を流して喜んだ。

亜希子は週に1度祐子に会えるのを楽しみに生活していた。しかし昨日の祐子はいつもの祐子ではなかった。会話もどこか虚ろで、亜希子に何か恐怖に似た心配を覚えさせていた。悲しげな目、体全体から漂う悲壮感を感じていた。翌日、昼近くになって康介が青い顔をして亜希子の部屋にやってきた。部屋に通されると、康介は立ったまま言った。

「ママが大変です。サスカブという護衛を一人だけ連れて、クツの首長の家に出掛けたんです。あんな所に一人で行ったら、生きて帰れる保証はないです。ママは話し合うと言っていたらしいんですけど、そんなことを理解する相手じゃないです」

何時になく真剣な話し方だった。亜希子は身体が震えるのを覚えた。

「鹿島さん、どうしたらいいのかしら。わたくし、何でもします。どうしたらいいのかしら？」

「なんもできないです。待つしかないです。看護婦の話じゃ、クツとの戦闘終結の約束を取り付けるために行ったみたいです」

康介が携帯で看護婦に電話すると、プチの人たちの緊張している様子が

手に取るように分かった。「テレパシーなどを使うと、ママのしようとしていることの邪魔をすることになるだけだ」という康介の言葉に、亜希子はただじっと待つ苦しみに耐えなければならなかった。時間がとてつもなく長く感じられた。助けたい相手に、救いの手を差し伸べないことが最大の救いになる時に味わう、待つ側の忍辱^{にんにく}の苦しみは「できるものなら、自分が代わりにその苦しみを引き受けてしまいたい」と思うほど辛かった。これは、自分とひとつである祐子と、分離されていることからくる苦しみなのだと思っただと亜希子は思った。康介は時々ブチの看護婦に電話をして様子を伺っていたが、看護婦達の言葉に乗って、悲しみと不安とがバイブレーションとなって伝わってきた。夕方になると康介が外に出てピザを買って来た。亜希子はそれに見向きもせず、只一心に祈り続けていた。康介はピザを頬張りながら言った。

「アキさん、食べなきゃ身体持ちませんよ。ママを助けに出掛ける時になって、動けなかったらどうするんですか？」

康介のやや強い言葉に、亜希子はピザの一切れを手にした。しかしそれを口に持ってゆこうとはしなかった。亜希子はピザをテーブルの上に置くと再び祈り続けた。康介は2時過ぎまで亜希子の部屋に居た。一旦部屋に戻ると言って、もう一度看護婦に確認の電話を掛けた。口を開き加減にして、相手の話しを聴いていた康介の顔がみるみるこわばってゆき、蒼白になった。

「やばいです。大変なことになりました。サスカブが襲撃を受けて帰って来ました。車は銃撃でぼろぼろになっているらしいです。でもママの姿は無いようです。」

亜希子は「わあーっ」と泣き崩れた。そして顔を上げると、泣きながら言った。

「わたくし、キャンプに行きます。お姉様を助けに行きます。えーん、えーん、えーん」

「アキさん、俺たちは介入できません。ママが無事なことを祈るしかないです。これは部族間の衝突です。ママは部族長なんです。ブチの人たちが解決しなくてはならないことです」

「お姉様はママだけど、わたくしの姉なの。わたくしの母なの。たった一人のわたくしのお姉様なの。鹿島さん、連れてって、キャンプに連れてって。お願い。えーん、えーん、えーん」

「分かりました。だけんど、ママの志を挫くような真似は、絶対だめです。我慢しなくてはだめです。ママはご自分の命を賭けてクツの族長の家に行ったのですから」

康介の目に涙が浮かんだ。ふたりは意識をはっきりさせるため洗面所で顔を洗い、アパートを出た。康介は自分の車に亜希子を乗せると、キャンプへの道を急いだ。キャンプまであと200メートルほどの所まで来ると、既に陽が昇り始めている。沢山の武装した兵士が所狭しとキャンプを取り囲んでいて、それ以上近づくことはできなかった。康介は看護婦に電話を掛けた。電話を切ると亜希子に向かって言った。

「ママの救出に、兵が動くようです。もう少ししたら、クツの本陣、首長の家に向かうようです。僕らも少し経ってから、後に付いて行きますか？我々にも身の危険が及ぶかも知れませんが、それでも・・・」

「はい、鹿島さん、ご一緒してくださいませ。お姉様をお助けするためでしたら、わたくしは命など惜しくありません」

やがて兵士が軍の装甲車に乗り込み、次々にキャンプを出て行った。装甲車とサファリー車の一連隊が完全に通り過ぎた後、少ししてから康介は後を追った。見失わないように注意をして走ったが、前に行く車の台数が多くエンジン音が轟いていたので、離れていても車影を追うことは難しくなかった。やがて、森の中に入って行った。暫く走ると、前に行く車が止まったのが分かった。兵士が車から降りている。康介は遠巻きに廻り込んで、小高い丘の上に車を停めた。木々の向こうに1軒の大きな家が建っているのが目に留まった。それがブチの首長の家に違いなかった。康介の車からは建物を斜め前方から見下ろすように望めた。家の窓はほとんど閉まっている。5階建ての建物だった。その建物の前面を取り囲むように兵士がいくつかのグループに分かれて地面に伏せ、直ぐに突撃できる臨戦態勢を敷いているように見える。康介は小声で言った。

「あれが、ブチの首長の家だな。祐子さんが無事救出されればいいんだ

が。もし交渉が決裂したら、激しい戦闘になる。絶対戦闘にならないように神に祈るだけだ」

亜希子は合掌して神に祈った。少しすると、建物の2階のベランダの中央に一人の人影が見えた。太陽の光を受けて、浮き上がって見える。それは不思議な出来事だった。その人影が何かを話し始めた。遠くて声など聞こえる筈はないのに、どういう訳か、亜希子も康介も耳の奥に言葉が響いてきた。

「****」(わが、愛する人々よ、クツの人々よ、ブチの人々よ、互いに助け合い、信じ合い、手を携えて、生きて行くときが来ました。わたくしたちは、元は一つです。同じように空気を吸い、同じように物を食べ、同じように血が流れている人間です。何の違いもありません。私たちは愛し合い、睦み会うためにこの世に生まれてきました。あなたの心を、優しさで満たしてください。どうして、両親を憎めますか、どうして、兄弟を憎めますか？どうして隣に住む人を憎めますか？どうして、同じときに生まれてきた、友を憎めますか？みな、愛しい人たちです。これまでの間違いは忘れなさい。さあ、クツもブチも武器を捨てなさい。これからはともに豊かな社会を作るために生きるのです。さあ、ごらんください、あの太陽がわたくし達を祝福し、このルワンダを愛の光で包んでいます。さあごらんください。いまから、私たちは一つです。お互いに助け合って生きてゆきます。さあ、ごらんください。・・・神よ、ルワンダに幸福を与えたまえ、ルワンダに繁栄を与えたまえ、全ての人たちに愛を与えたまえ・・・ありがとうございます)

亜希子が震える声で言った。

「お姉様よ。お姉様だわ。ああ、神様！」

「アキさん、見て！」

太陽が急に輝きを増して、目が開いていられないほどだ。太陽の周りの光輪がくるくると回り始めた。天空が海のようにうねり、波打って、光輪の光を受けて輝いている。空の中心からスポットライトのように、一筋の強い光が差し込んで、祐子を包んだ。祐子の身体が光によって空中に引き上げられてゆく。亜希子と康介はその光景を呆然と見つめていた。

再び耳の奥に声が響いた。

「*****」(さあ、武器を捨てて、ルワンダを天国にするために働くのです。あなた方は一つになって、生きてゆくのです)

家の周りを取り巻いていた兵士達が一斉に武器を捨てるのが分かった。ほとんどの兵士達はその場にひれ伏した。それから、少しして、まるで、吊りロープで降ろされるように、祐子がゆっくりベランダに降りた。光のベールは消え、辺りに、きらきら輝く光の粒が降り注いだ。亜希子と康介の目から涙が流れ落ちた。ふたりとも話す言葉を見つけられなかった。

ふたりは、建物から出て来た祐子が、そこで待っていたブチの長老達に守られるようにして、サファリー車に乗り込むのを確認した。ふたりは兵が全て撤退してしまってから、アパートに戻った。アパートに着くと、鹿島は亜希子の部屋を訪れて、そこで祝杯を挙げた。冷えたプリムスの味はひとしおだった。残っていたピザとチーズで夕食を済ませた。ふたりは朝から何も口にしていないことを思い出した。康介はたった1杯のビールで急に酔いが廻ってきた。亜希子はひとかけらのピザで急に睡魔に襲われた。ふたりはそのままソファで寝入ってしまった。翌朝気が付くと、既に陽が高く上がっていた。康介は亜希子の部屋で寝入ってしまったことを恥じて、そそくさと自分の部屋に戻って行った。亜希子がシャワーを浴び、身支度を調べて寛いでいると、祐子から電話が掛かって来た。

「アキ、今日、お昼を一緒に食べよう」

「お姉様、ご無事で何よりですわ。お待ちしております」

「どうしたの？ご無事で何よりって？あなた知っていたの？」

「はい、昨日、鹿島さんとクツの族長の家に行きました。お姉様のお言葉、心に染みました」

「あなた、聴いていたの？一体どこで・・・まあ、それは後でお話ししましょう。今日はね、あなたを連れてアガセケの工房に行ってみたいのよ。フルマで扱おうか、どうしようか迷っているの。製作に細かい手作業が要るの。沢山は製造できないのよ。プラトは扱うことにしている

のよ。あなたの意見も聞かせて欲しいの。その後で、美味しいインド料理のお店に連れて行ってあげるわ」

「本当ですか？嬉しい。今日は最高の一日になりそうですわ」

10時を少し過ぎた頃、祐子が2人の護衛を連れて、アパートに現れた。事務員の女性が、亜希子の部屋に連絡に来た。祐子は腹帯を締めてその上にサファリーウェアを着ているため、亜希子には、祐子の身体が一層大きく感じられた。亜希子は薄いピンクのワンピースを着て出掛けた。

「お姉様、今日は、サスカブさんはご一緒じゃないの？」

「彼は、今日は忙しくて来られなかったの。彼はとても、男らしいひとよ。今度も、わたしを守ってくれた。私はずいぶん彼に助けられているのよ」

ふたりは護衛の運転する車で、キガリの郊外にある小屋の様な小さな建物の前に車を停めた。護衛はふたりの前と後ろを歩いた。小屋の中に入ると、ぱっと明るい色がふたりの目に飛び込んできた。

「わあ、美しい！」

亜希子が思わず叫んだ。いろいろな色に彩られた、大小様々な形のアガセケが床一杯に並べられていた。床の上に座って、アガセケを編んでいる女性たちと、できあがったアガセケを仕上げしている女性たちが居る。いろいろな色に染め上げられた材料のサイザル麻とイシングという草の葉が壁際に積み上げられていた。祐子の姿を見ると、作業をしていた女性達が、祐子に挨拶しようとして立ち上がり掛けた。祐子はそれを止めて、自分からしゃがみ込んで彼女たちに言葉を掛けた、仕事をしている女性は5人居たが、5人にそれぞれ一言ずつ言葉を掛けて、作品の出来映えを褒めた。5人はそれぞれにうれしそうに歯を出して微笑んだ。祐子はスワヒリ語を使って、亜希子に話し掛けた。

「*****」(アキ、どのアガセケがいいと思う?)

「*****」(はい、お姉様、わたくしはそちらの黄色と赤のスパイラル模様の少し太めのアガセケが気に入りました。それと、あの端にある細長いブルーの作品もシンプルなところと、海のような美しさに惹か

れます)

「*****」(そう、どちらも原色ね。わたしはどれも、それぞれに味があっというわ。デザインも素敵なものが多いわね。もう少しサイザル麻の繊維目が揃っていると、ワンランク上の品質になると思うのよ。それと、結び目の処理ね。難しい部分だけど、ブランドになれば、今の数倍の値段で取引できるわ)

祐子は作業している者たちに聞き取れるように、少し大きめの声で話した。亜希子も、スワヒリ語を使う祐子の意図を意識して、できるだけ言葉を正確に発音するように努めた。ふたりは暫くの間作品を見て、いろいろ感想を述べた。それから全員に礼を言うと、アガセケの工房を出て、食事をするためにキガリの町に戻った。町の外れにあるカバナ・カバザナという名前のインド料理のレストランに行った。中に入ると真新しく感じるグレーのタイルの床とハヌマン神の絵が掛けてある深緑色の壁が目飛び込んできた。レストランの入り口奥に噴水が音を立てている。その横にバーコーナーがあり、5、6名の観光客がビールを飲んでいた。祐子の姿を見ると直ぐに、ウェイターがやってきて言った。

「*****」(ママユウコ、ようこそいらっしゃいました。お席は用意できています)

祐子は微笑んで頷くと、亜希子に附いて来るように言った。そして、ドアの横に立っている2人の護衛の男性達を手招きして言った。

「*****」(一緒に、食事をしましょう。インド料理食べたことあるの?)

2人の男性は、顔を見合わせて、首を横に振った。

「*****」(附いて来てね。大勢で食事した方が楽しいわ)

案内されたテーブルは4人掛けだった。祐子と亜希子が並んで座り、2人の護衛の男性がその後で、遠慮がちに座った。

「*****」(あなた達は2人でお話ししてね。わたしはアキと話すから。食事は遠慮せずにいただくのよ。楽しみなさい)

祐子は、あくまで優しい。2人の男性の目にうっすらと涙が浮かんだ。レストランの端で4人のインド人らしき男たちが、インドの民族音楽を

演奏している。祐子が既に予約してあるようで、何も注文しないのに料理が運ばれて来た。食事はサンバルという野菜を煮込んだスープとチキン・ティッカ・マサラという鳥肉のカレーで、サラダ、バター・ナンと共に出された。ウェイターはとても、フレンドリーで居心地がいい。香辛料がきいていて美味だった。祐子と亜希子は、久しぶりのカレーを楽しんだ。2人の男性は、初めは遠慮がちに食べていたが、祐子と亜希子が話し始めると、カレーに手を出し始めた。途中でナンが少なくなると、ウェイターが追加してくれた。男達は、ナンだけでも美味に感じているらしく、小声でぼそぼそ話しながらよく食べた。

「お姉様、このレストランにはよくおいでになれるのですか？お料理、とっても美味しいですわ」

「ええ、最近時々フルマの関係で、昼食の時に商品の取引相手の会社の人と一緒に来るわ。相手の会社が招待してくれるのよ。このお店は評判がいいのよ。アキは初めてなの？」

「はい、わたくしは、あまり遠いレストランには出掛けません」

「そうね、まだ、その方がいいわね」

「お姉様、わたくし、昨日お姉様が空に舞い上がるのを見ました。とっても感動しました」

「あれは、わたしじゃなかったのよ。身体はわたしだったけど、ベランダに出てからは、身体が自然に動いて、知らないうちにみんなにお話ししていたの」

「わたくし、ずっと遠くに居たのに、お姉様のお話しする声が、耳の中で聞こえるようでした。お姉様、空に浮かんだときは、どんな感じだったのですか？」

「それが不思議なの。自分と空気、それに周りの景色、周りにいる大勢の人々、その区別ができなくなっていたわ。みんなが自分の中にいて、わたしが、一人一人のみんなの中に居る、そんな感じなのね。それも感覚的にそう感じているんじゃないの。それが実態って感じなのね。そうね、丁度自分が一滴のインクになって、池の中にぽつんと落ちて、池の水全体に融けてゆくような、そんな感じかしら」

クツの族長の家での出来事が起きてから、その噂はたちまち、ブチとクツの人々の間に広がった。祐子は大統領からの召還を受けた。大統領は祐子の勇気ある行動を称え、その結果、両種族間の憎しみの感情を、和らげることができたと話した。大統領は同時に日本との交易の重要性に附いても語った。祐子は礼を述べてそのまま退席した。祐子が大統領に謁見したという噂も広がり、祐子を一目見ようと、連日人々がキャンプを訪れるようになった。祐子は訪れる人とそのたびに握手をし、優しい言葉を掛けてあげた。初めは、訪問者はブチの人たちだけであったが、マリー・ジュベステルが3人のクツの娘を連れて来て、祐子に引き合わせてから、クツからも訪問者が訪れるようになった。祐子の計画は順調に進んだ。鹿島の努力でやっと事務所の設立まで漕ぎつけた。外部からの資金の調達が進んだが、肝心のブチ族の農場からの出資が予定の半分にも達さなかった。農場主たちは、それでも精一杯努力をして協力しようとしていたが、投資できる程の蓄財が無かった。祐子は賢に助けを求めるとも考えたが、今、賢たちが人間の意識改革に取り組んでいることを考えると、賢の仕事にブレーキを掛けるようなことはしたくなかった。ある日、マリー・ジュベステルが一人でやって来た。

「ママ、わたし、フルマ・カンパニ（慈悲の会社）に、全財産を投資します。500ミリオン、ママ、フルマの資金、大丈夫？」

「マリー、ありがとう。500ミリオンあれば、フルマの運営が順調に行くわ。そんなに沢山のお金、どうしたのですか？」

「わたし、諜報員だった。今は、止めた。本部からお金沢山貰ってた。あなた買ったお金、私のお金。ブチの人々苦しめた。お金返す。ママ、フルマの資金に使って」

マリーは祐子に5億ルワンダフランの小切手を渡した。無償だと言った。マリーの資金提供で、フルマは事務所の建築費用の借入金の返済を済ますことができ、事実上、無借金の運営に移行できた。鹿島の働きで、コーヒーの日本への輸出ルートが確立し、主婦や未亡人の作るバスケット類の輸出も始まった。NGOなどの協力で、日本のデパートやインテリ

アショップなどからフルマに注文が入るようになった。初めは懐疑的だった女性達も、バスケットが売れるということを知ると、仕事を求めて新たに仲間に加わる者、自分の家に作業場を設けてバスケットを作る者なども現れた。フルマはそれらの女性達からの売り込みに対して、等級を決めて厳しく品質管理を行った。女性達は、良い品物を作ると高く売れるということを身をもって知ったため、自然にバスケットの品質が向上していった。コーヒーの品質管理はもっと厳しかった。袋毎のサンプリング（抜き取り検査）が行われ、試験官が実顕顕微鏡を用いてサンプル品の品質を確認していった。品質管理の一環としてサンプリングされた豆は直接試飲係によって味と香りの確認がなされた。フルマは鹿島の会社ムーンボックスに立ち入り検査を要請し、受け渡し時点での品質の認定をしてもらう方式を採用した。そのやり方が功を奏し、自然にブチのコーヒー豆の品質のよさが業界に知れ渡っていった。他の国の仲介業者からも取引の申し込みが入るようになった。フルマは競争原理を用いてバイヤー同士に競争させ、安全性の高い国の会社と契約を結ぶという方針を採った。そんな繁忙な中でも、ムーンボックスへの商品の供給は第1優先で取り扱うことにしていた。フルマに活気が出てきた頃、祐子は貧しい女性達への基金を開始した。貸し出しは、彼女達がバスケットを造ったり、果実の栽培をしたりするための材料や設備の購入、インフラの整備などの直接仕事に必要な経費の補助という条件を付けた。文字の書けない彼女達から、口頭で計画を聞き、妥当性を検証し、無理がある場合は修正させて、それをフルマの事務員に文書化させてから、貸し出しを行った。それ以外の条件は一切付けなかった。初めは恐る恐る申し込みしていた女性達も、事務員が、懇切丁寧に指導してくれることが分かって、安心して申し込むようになってきた。その頃のブチの人々の祐子に対する印象は、神的な存在という印象に、実業家というイメージが加わっていて、祐子から直接言葉をかけられでもすると、緊張のあまり言葉に詰まって何も話せなくなったり、感動して涙を流したりするものまで現れてきた。祐子自身は以前と何も変わらなかった。只、腹部がはっきり分かるほど目立つようになってきていた。フルマの活動は次第

にクツや政府関係者にも知られるようになった。政府はクツの中にある協同組合の組織を、もう少し強化するようにグルワクに通達文書を送った。

ギコンゴロ

亜希子は祐子がクツとブチの終戦を実現させてから、時々キガリからバスで3時間ほど掛けてギコンゴロ（Gikongoro）という街に出掛けた、ムランビのジェノサイド・メモリアルまではバス停から更に1時間ほど歩かなければならない。康介から聞いていたので、亜希子はバイクタクシーを使った。康介は料金の相場を教えてくれた。高い値段を示すタクシーは断り、相場の料金を示すタクシーに乗るように言われていた。康介は安全の為に、必ずそうするように言った。亜希子は体調のよい日を選んで出掛ける様になった。行くときは必ず、先ずシャワーで身を清め、白いワンピースを着て、一切装身具を着けずに出掛けた。メモリアルに居るガイドの、年長の女性がいつも亜希子に附いて一緒に廻ってくれた。一人で最初に訪れたのは、祐子の終戦宣言の3日後だった。意識を現実からずらさないようにした。賢と一緒に居ないので、一人で死後の霊の世界に入ってゆく自信が無かった。再び襲ってきたメモリアルの衝撃は、亜希子の魂を悲しみで揺さぶった。亜希子はガイドの女性の胸で泣いた。メモリアルを出てから大通りに向かって歩いていると、後ろから誰かが附いて来るのが分かった。初めは一人だと感じていたが、それが2人になり、3人になり、次第に増えてゆき、7、8人が附いて来る。亜希子はふと振り返ってみた。しかし誰も居ない。また歩き始めると誰かが附いて来る。亜希子は立ち止まり、これまで霊界を見ないようにしていた意識を解放した。意識を幽界に向けてみると、果たして沢山の子供達の姿があった。よく見ると、先ほどメモリアルで見たような衣類を着ている。亜希子はそれが皆、ジェノサイドで亡くなった子供達だと知った。亜希子は自分の心に翳りが無いかどうか、もう一度確認して

から、子供達の方を見た。意識で子供達に話し掛けてみた。言語は関係ないようで、日本語の意識で話し掛けても、子供達はそれを理解しているようだった。

「君たち、どうしてわたくしに附いて来るの？」

一人の7歳くらいに見える子供が言った。

「ママが居ない。お姉さん、知らないかな？」

すると、もう一人の5歳くらいに見える女の子が言った。

「お姉ちゃん、パパもママも居ないの。クク寂しいの。お姉ちゃん、わたしと遊んで」

ククというのがこの子の名前のようにだった。亜希子は子供達に言った。

「君たち、パパやママは、遠くに居るのよ。おりこうさんにしていたら、パパやママに会えるわ。お姉さんはまた来るから、それまで待っていてね。おりこうさんには、おみやげを持って来てあげる。男の子にはボール、女の子にはお人形をね。さあ、おじさんたちやおばさん達の居るところに戻りなさい。いいわね。お姉さん、必ず約束を守るから。それまでみんな仲良くして待っているのよ」

子供達は頷くと、素直にメモリアルの方に向かって歩いて行った。亜希子は霊界に繋がる意識を閉じた。バイクタクシーに乗り、バスに乗り継いでアパートに戻ったのは夕方だった。シャワーを浴びて身を清め、瞑想をして自分に絡んだ想念のかけらを振るい落としした。簡単に夕食を作って食べると、亜希子は早速、こどもたちと約束した人形とボールを作ることにした。この日は先ず人形を作ることから始めた。自分の意識を幽界に移動して、そこで人形を作り始めた。先ず全ての素材を、意識で集めた。初めは自我意識と現象界の事物が絡んでいて、素直に創造することを妨げていたが、ふと自我意識が執着を生み出すという賢の言葉を思い出し、息を吐き出すと同時に自我を横に置いてみた。すると事物に結びついている固定的な概念が消え、思った形の人形が自由に作れるようになった。亜希子は全部で20体の人形を作った。そして、大きな人形ケースを作ると、一旦その中に納めた。人形ケースの蓋を閉めてから、意識を現象界に戻した。亜希子はベッドに潜り込み、静かに眠りに着い

た。その夜は何も夢を見なかった。その翌日はボールを作った。ボールも20個作り、昨日作った幽界のケースに仕舞った。ケースの中には、昨日作った人形がきちんと並んで入っていた。自分はきちんと並べた記憶は無かったが、蓋を閉めるとき、心の中できれいに並べて入れればよかったという気持ちと、並べて入れたときの情景をほんの瞬間想像したのを思い出した。その気持ちが作用したのだと思った。そこは意識がそのまま形になって現れる世界だった。亜希子は幽界を出ようとして、ふと幽界は意識を向けると、いろいろなところに移動してしまう場所だということに気付いた。今亜希子のいる場所は、何も無く、誰も居ない場所だったが、人形を作ったり、ボールを作ったりするとき、材料を手に入れようとしたら、自動的にその場所に移動し、これで人形を作れると思うと、また元の場所に戻っていたのだ。亜希子は少し試してみた。久しく食べていないリンゴを思ってみた。直ぐに籠一杯のリンゴが顕れた。次に賢の好きなメロンを思ってみた。メロンは切れていて、食べるばかりの状態で顕れた。亜希子はそれらが品物として目の前に現れ、自分が現在居る場所は移動していないことを知った。今度は、バスタブに浸かって入浴したいと考えてみた。直ぐに、バスタブのある部屋の中に自分が居るのが分かった。品物を想起すると品物が顕れ、行為を想起するとその行為を行える場所に移動することが分かった。亜希子は一旦幽界を出て現象界に戻った。幽界で作ったものを入れた箱は、どんな場所に居ても呼び出せるのかを亜希子は調べておきたかった。翌日の朝食は外のレストランに行くことにした。ブッフエスタイルの食事を終わると、亜希子はコーヒーを飲みながら、幽界に入ってみた。そこでも箱を呼び出すことができた。亜希子は安心してアパートに戻った。

翌日祐子が亜希子のアパートにやって来た。祐子はフルマが順調に推移していると言って喜んでいて、祐子は、生活に苦しんでいる人たちに歓びを与えるために、少しでも余裕があればダンス教室に通うように指導していると言った。亜希子は貧困とダンスのイメージがしっくり合わなかったが、祐子のやることは全てが神々しく感じていたので、それもきっとすばらしいことに違いないと思った。亜希子は自分がジェノサイド

・メモリアルに行ったことを報告した。祐子は亜希子に、意識の使い方に気を付けるように言った。亜希子がテレポーションし易い特性を持っていることを気にしていた。ジェノサイドで苦しんで死んで逝った人たちの中には、様々な意識を持っていた人たちがいるので、荒んだ意識に左右されないように細心の注意をするように忠告した。亜希子は祐子の忠告を素直に聞いていた。ふたりはそれから、原の発明したオーラビジョン・システムについて話し合った。亜希子がいろいろ説明したが、祐子にはそのようなマシンは想像もできなかった。しかし、亜希子がそのシステムを使って逢ったという両親に、自分も是非一度逢ってみたいという衝動が湧いて来たので、深く息を吸い込んで、息と共にその執着心を吐き出した。

亜希子が2度目にジェノサイド・メモリアルを訪れたのはそれから2日後だった。亜希子はやはり幽界への通路を絶って、中に入った。ガイドの女性が亜希子を覚えていて、亜希子に寄り添い、肩を抱くようにして中を廻ってくれた。亜希子は子供達の亡骸を見た。そこには前回訪れたとき、帰りがけに後を追って来た子供達の悲惨な骸^{むくろ}があった。しかし、それ以外の子供達の亡骸も沢山あった。亜希子はその場では幽界への通路は開かなかった。メモリアルを出てから直ぐに幽界に入ってみた。子供達は約束を覚えていた。亜希子は沢山の子供達に囲まれた。子供達の数は20人を超えていた。前回約束をした子供達ばかりではなかった。不思議なことにそこには人形とボールを入れた箱は顕れなかった。亜希子は幽界の中で目を閉じ、箱を想起した。箱が顕れると子供達の姿は消えた。亜希子は箱を抱え、意識を子供達に向けた。再び姿を顕した亜希子を見ると、あちこちきよろきよろしてうろついていた子供達は、また亜希子の周りに集まって来た。

「あつ、お姉さん、どこかに消えちゃったと思った」

「お姉さん、約束の人形は？」

「僕のボールは持って来てくれた」

亜希子は箱を置いて蓋を開けた。約束をしていない子供達が覗き込んでいる。約束した子供のうち5人の子供が、約束していない子供達に向か

って言った。

「おまえら、約束してないだろう、あっちに行けよ」

約束していない子供達は、悲しそうに後ずさりした。亜希子が言った。

「お友達に優しくしなくてはいけないのよ。みんな仲間じゃないの。ボールも人形も全員の分があるわ。足りなければ、お姉さんが、また作ってきてあげる」

それでも、悲しげに後ろで見ている子供達を近づけないように両手を広げて、通せんぼをしている子供が居た。亜希子は言った。

「みんなの居るこの場所は神様の居る世界の近くにあるのよ。優しい人だけが神様の住んでいる世界に行けるのよ。パパやママに、他の人に優しくするように言われたでしょう。優しい子供が一番いい子なのよ」

「ぼくのパパは、強くなれって言ってる。強ければ誰にも負けないって。悪いやつもやっつけられるって」

その子は言った。亜希子は

「きみ、友達がゴリラに襲われたとき、きみは助けてあげることができる？そういうときに友達を助けることができる子のことを、強い子って言うのよ。友達は大切でしょう。弱い人や、困っている人、苦しんでいる人、悲しんでいる人、そういう人に優しくできる子が強い子なのよ。威張ったり、怒鳴ったり、意地悪するのは強い子じゃないわ。お姉さんね、一度悪い人に連れて行かれて、いじめられそうになったの、そのとき一人のお兄さんが現れて、その悪い人に、「止めなさい」って言ったの。その悪い人たちは、刃物を持っていたわ。お兄さんは何も持っていなかったけど、とっても強かった。堂々としていたの。そしてわたくしを助けてくれたのよ。その後でね、びくびくしている悪い人たちを逃がしてやったのよ」

「どうして、悪い人を逃がしてやったの？強いんだから、悪い人はやっつけちゃえばよかったのに」

その子供が亜希子の話に乗ってきた。

「そのお兄さんはね、本当に強い人だったのよ。どんな悪い人よりも強い人だったの。だから許してやっても、怖くも何ともないって思ってい

たのね。許してやっても、いつかはその人達が、いい人になると信じていたの。きみもそういう、強い人になりなさい。悪い人でも許してあげられるのが、一番強いひとなのよ」

少年は後ろの方で小さくなっている5人ばかりの子供達の所に行った。

「おい、みんな、こっちに來いよ。こっちに來てお姉さんからプレゼントもらえよ」

と言った。小さくなっていた子供達は、喜んで手前にやっけて來た。亜希子が全員に言った。

「あなた達は生まれる前の世界に居るのよ。これから、優しいおじさんが來て、あなたたちを楽しいところに連れて行ってくれるわ。おじさんの言うことをよく聴くのよ。さあ、みんな分かった人から一列に並んでちょうだい」

子供達は分かったとみえて、後ろにいた5人を除いて、全員が1列に並んだ。

「君たちも、列に並べよ。僕の前にならんでもいいぞ」

みんなを通せんぼした少年は5人を列に附かせて、自分は一番後ろに並んだ。亜希子は女の子には人形、男の子にはボールと、一つずつ渡していった。渡すときに必ず

「元の世界に戻るのよ」

と言った。子供達は亜希子の目を見つめ、頷いて受け取っていた。全員が亜希子からプレゼントを貰うと、子供達は貰った人形を翳してみたり、ボールを投げてみたりして、嬉々とした表情になった。子供達の歎びの感情で、辺りが明るくなった。亜希子はこの子達が、この周辺にできた暗い想念に包まれた幽界を抜けて、明るい靈界に導かれると確信した。そのとき遠方から一人の優しそうな男性が近づいて來た。亜希子に向かって深く頭を下げると、子供達に來るように手招きした。子供達はプレゼントを手にして、飛び跳ねながらその男性の方に向かって行った。亜希子はそれが靈界への案内人だと思った。

その日も亜希子はアパートに着くと、身を清め、自分の身体にまとわりついている浮遊物を振り落した。

亜希子の話を理解できる、メモリアルの時空間に閉じこもっていた子供達は、直ぐに幽界から抜け出して帰霊することができた。しかし、まだ意識が定まっていない嬰兒や、意識が固くなり過ぎている大人達の説得はそう簡単ではなかった。亜希子は幽界の中にも数え切れないほどの領域が在ることが分かってきた。それは人々の想念の作り出した場であることを知った。5回目にメモリアルを訪れたとき、亜希子は初めて幽界への通路を開いた状態で中に入ってみた。中は暗い想念が渦巻いているように感じた。亜希子は先ず、その中でも比較的明るい想念を持っている若い男性に意識の焦点を当ててみた。その男性は頭を鈍なたのようなもので割られて多分即死した男だ。その男性に焦点を絞ると、

「俺はどうしたんだ。誰か助けてくれ、ここは何処だ、頭が痛い」と騒いでいる。既に、身体は五体満足な状態に戻っている。その周りにも5名の存在を認識できた。2人の男性と3人の女性だった。悲しみと、苦しみの感情が亜希子を捉えた。6人が悶え苦しんでいる様子が分かった。一人の男性は

「苦しい、苦しい。助けてくれ、腹が痛い、手が痺れる」

と訴えている。もう一人は、

「痛い、痛い、首が痛い、足を切られた、助けてくれ」

ともがき苦しんでいる。女達は皆、強姦され殺されたようだった。感情的なパニックとヒステリーが入り交じった、錯乱状態に陥っていた。亜希子は6人に向かって言った。

「あなた方は、もう随分前に死んでいます。痛い、苦しい昔の身体は何処にもありません。さあ、いいですか、わたしがハイと言ったら、元気なときの身体に戻ります。いいですね・・・1、2、3 ハイ」

6人とも、亜希子の言葉は聞こえたようだが、依然として苦しんでいる。亜希子はいいことを思い付いた。救急車を呼ぶことにした。そして、病院を建ててみることにした。それは外観だけでよかった。6人の前に、サイレンを鳴らして3台の救急車が現れた。亜希子が言った。

「救急車の中で、あなたの身体は麻酔を掛けられて痛みが治まります。そして、病院に入れば傷も直ぐに直ります。女性の方は、婦人科に行っ

てくださいね。いいですね」

それを聞いて6人は救急車に乗り込んだ。面白いことに全員、自分で歩いて車に乗った。亜希子が創造した病院の入り口で救急車は止まった。6人はもう、痛みを訴えることなく病院に入って行った。暫くすると6人は歩いて出て来て、亜希子の前に来ると頭を下げ、口々に礼を言った。鉈で頭を割られた男が言った。

「ありがとうございます。あなたのおかげで、直りました。ほら、この通り、5体満足な身体に戻りました」

女性達も喜んでいて。女性の内の代表のような年配者が言った。

「わたしたちは、悪いやつらに乱暴にレイプされました。でも先生が身体を洗って、消毒してくれました。先生がもう大丈夫だと言いました。本当にありがとうございました。それに、痛かった傷も治って、この通り元の身体に戻りました。ありがとうございました」

いつの間にか救急車も病院も消えている。6人はそんなことにも気付かない。亜希子が言った。

「皆さん、実はあなた方は、もう死んでいるのですよ。死んでも、身体も心もあることが分かるでしょう。誰も恨まず、悲しみも捨てて、天国に行ってください。あなたが天国に行きたいと思えば、天使があなた方を招待して、迎えに来てくれます。いいですね」

6人は、自分たちが死んでいることを、既に知っていた。しかし、苦しみのループから抜け出せなかったのだった。亜希子の言葉で、6人の周りに明るい歓びの空間が現出した。一人の天使のように羽を付けた女性が空から舞い降りて来た。亜希子はその天使の姿も意識の造形であることを認識した。6人は両手を組んで、祈るようなポーズを取った。天使の女性は6人を連れて、空に舞い上がって行った。亜希子はほっとして、直ぐに幽界から抜け出した。そして家路を急いだ。大分陽が短くなってきていた。バスの窓から丘に沈みゆく夕日が見える。辺りに静けさと、穏やかな雰囲気広がっていた。亜希子はこの日の帰り道をことさら爽やかに感じていた。アパートに着くと、康介がラウンジで待っていた。

「アキさん、今日は、俺とデートできる？」

亜希子はびっくりした。

「えっ？デートですか？わたくしたち、恋人じゃないでしょう」

「なんちゃって、今日だけ、俺のパートナーになってくれないかな？」

「えっ？」

「俺、ダンススクールに入ったんす。今日、初めてのレッスンで、一緒に行って欲しいす。現地の人じゃ、無理っしょ」

「鹿島さん、らしくないですわよ。ダンスなんて」

「アキさん、ダンス嫌いですか？」

「わたくし、踊れますわ。ワルツ、タンゴ、ブルース一応一通り、習いましたから」

「そういうのところがうす。太鼓とか叩いて踊るやつす。ママから聞かなかつたすか？フルマが民族音楽に資金供与するつす。貧しい人には、ダンス教室の代金を出してやるつす。俺、なりゆきで踊ることになつちやつたす。男が足りないらしいす。親善すよ」

「そういえば、お姉様もダンス教室のことをおっしゃっていましたわ。そのダンス教室なんですね。とっても素敵ですわ。わたくし、鹿島さんが踊るの、是非一度拝見したいわ」

「やめよかな。やばいす。俺、見られるの好きじゃないす」

亜希子は一旦部屋に戻り、シャワーで身を清めてから、朱色に黄色い水玉の入ったチュニックと、ベージュのクロップドパンツに着替えた。急いでラウンジに降りて来ると、康介は落ち着かずに、テーブルの近くを行ったり来たりしていた。ふたりは、そのままダンス教室に向かった。開始は7時からだった。キガリの市内はあまり明かりが無いので、夜は暗かった。亜希子は鹿島を信頼し切っていて全く不安を感じなかった。ダンス教室は沢山のルワンダ人で一杯だった。奇麗に着飾っている者も、普段着のまま来ている者もあった。初めに指導教官の説明があり、その後で全員が教官の動作を真似るだけだった。振り付けはそれほど難しくはなかった。康介はぎこちなく踊っていた。教官に勧められて亜希子も踊った。太鼓や、弦楽器の演奏に合わせて、1時間ほど踊った。料金は帰りがけに寄付の形で払った。ダンスを終えると、康介が亜希子をレス

トランに招待すると言った。

「鹿島さん、今日はどうしたのですか？」

「俺、今日は嬉しくて、ダンスまでしちゃって、どうかしちゃったかもしれない？」

「何があったのですか？」

「ママの部下がレアアースの鉱脈を見つけたんす。ママがすごく喜んでるんす。俺も嬉しくて・・・フルマが大会社になるかも知れないす。みんなが豊かになれるかも知れないす。絶対内緒っすよ。この話、秘密っすからね」

康介は本当に嬉しそうだった。亜希子は祐子が鹿島を全面的に信用していることを知った。自分にも話さないことを、既に鹿島は知っていた。しかし、亜希子には康介に対する嫉妬心は湧かなかった。これはビジネスの話なのだと思った。レストランでの食事も楽しかった。康介はプリムスを飲んで、饒舌だった。しかし、フルマのことは一言も口にしなかった。来週香川が引っ越して来ると言った。残念ながら、アパートの部屋は既に塞がってしまっていたので、別のコンドミウム風のアパートに入る予定だと言った。そこは亜希子達のアパートから車で20分ほどの、2つ向こうの丘にあると康介は言った。自分たちと一緒にアパートでない方がいいとも言った。香川を信用しないわけではないが、祐子が亜希子を訪問する時に、香川が近くに居ない方がいいと康介は思っている。香川の意に反して、祐子や亜希子の存在が東領製作所に漏れる危険性があることを懸念しているのだ。亜希子は祐子が何故康介をこれほどまでに信用しているのか分かったような気がした。康介は祐子の為に生きているのだった。

ふたりがアパートに戻ったのは10時を回った頃だった。亜希子はテレポーションしてしまわないように、バスロープの紐で自分の脚をベッドに縛り付け、賢への意識を解放してみた。賢に意識を向けると、額の裏に懐かしい姿が映った。賢は立って何かを説明しているようだった。賢が強い波動を受けているのが感じられた。しかし、賢は涼しい顔をしている。どうやら、賢が激しい言葉の攻撃を受けているらしいというこ

とが分かった。亜希子は、直ぐに意識を賢から放した。このまま続けているのは、賢の邪魔をすることになると感じた。賢のことは心配だったが、あの涼しい顔は苦痛を感じていない顔だと思って納得した。脚を縛っていた紐を解くと、この日一日のことを振り返って、そのまま眠りに落ちた。それから数日して亜希子は、いつもの白いワンピースを着てメモリアルに出掛けた。雲行きが怪しかったので、日本から持って来た折りたたみの傘を持って出掛けた。バスを降りると小雨がぱらついてきた。バイクタクシーは幌があったが、雨の雫が脚にかかり、メモリアルに着いた時には脚が冷たくなってしまっていた。バイクタクシーを降りると、亜希子はハンカチを出して、濡れた手足を拭った。昨日と違い、あまり気乗りがしなかった。しかし、ここまで来てしまったので、気力を振り絞りメモリアルに入って行った。いつものガイドの女性が居たが、どういう訳かこの日は一緒に附いて来てくれなかった。見学者は誰も居ない。亜希子は、意識で幽界への通路を閉じ、冷えた腕をさすりながら、展示室に入って行った。この日亜希子は幼い嬰兒の魂を救いたいと考えていた。他の展示室の前を素通りして、嬰兒の骸の並んでいる部屋に入ろうとしたとき、いきなり冷たい水をかぶったように一気に身体が冷えてきたかと思うと、何かで後頭部を殴られたような気がして、その場に倒れ込んでしまった。目を開けると、無数の霊達が見える。一方から痩せて餓鬼の様な姿をした黒人の男達が鎌を手に、亜希子に迫って来る。反対側からは鉄の棒や、ハンマーを手にした盗賊のような白人の男達が迫って来た。餓鬼達が亜希子の手を取ろうとした。しかし、盗賊達はその餓鬼の頭めがけてハンマーや、鉄棒を振り下ろした。餓鬼達は身を翻して、盗賊達に襲い掛かった。亜希子の目の前に修羅場が展開した。どうやら亜希子を奪い合っているようだった。そこに盗賊や餓鬼の3倍も背丈のある鬼のような大男が現れた。口の周りに血が滴っている。右手には、切り取った人間の手を持って居て、それを食べていたのが見て取れた。亜希子は意識の中で、目の前で展開しているのは幻影であると言いつけたが、あまりにもリアルで、その恐ろしさに文字どおり体中の毛がピンと立っている。亜希子は自分の身体が音を立てて震えているのを感じた。

目を閉じても、亡者どもは消えなかった。亜希子は賢に助けを求めた。

「あなた、助けて！あなた、助けて！助けに来て！」

目の前がぱっと明るくなり、賢が頭れた。亡者達はあっという間に雲散霧消してしまった。

「亜希子、大丈夫か？どうしたんだ。ここはジェノサイド・メモリアルじゃないか？」

賢は亜希子を抱き起こした。亜希子は賢に齧り付いた。賢は亜希子をしつかり抱き締めた。身体が冷たい。亜希子の身体が温くなるまで、暫くそのまま抱き締めていた。身体が暖かかくなってくると、賢は亜希子の手と足を擦ってやった。漸く亜希子に血の気が戻ってきた。賢は亜希子の身体を抱きかかえながら立ち上がらせた。

「さあ、目を開けて、もう大丈夫だよ」

亜希子が目を開けると、賢の姿は無かった。しかし、賢が側にいるのは感じる。亜希子は思い切って、嬰兒の骸の部屋に足を踏み入れた。幽界への入り口を開いてみたが、一人の霊の姿も無い。亜希子は一人の嬰兒の骸に意識を集中してみた。そこに嬰兒の幽体が浮遊しているのが分かった。その周りに母親と思われる女性がしがみついているのが見える。母親は苦しみを訴えている。

「苦しい、苦しい、ああ、神様、この子を救ってください。この子が壁に投げつけられて・・・ああ、苦しい、助けてください」

嬰兒の骸の横に、母親と思われる骸が横たわっていた。嬰兒と少し距離があり、母親が手を伸ばしているような形で死体は置かれていた。亜希子が言った。

「お母さん、赤ちゃんはもう、助かりましたよ。あなたも助かりました。いいですか、よく見てご覧なさい。さっき神様がお見えになって、あなたの傷を治してくださいましたよ。ご覧なさい、もうすっかり治っているでしょう。赤ちゃんをご覧なさい。ほら笑っているでしょう」

母親は、自分が縋りついていた嬰兒の身体を抱きあげると、胸に抱き締めた。嬰兒は健康そうな姿を顕した。微笑んでいる。母親は言った。

「ありがとうございます。もう、痛くありません。神様がわたくし達親

子をお救いくださったのですね。ありがとうございます」

母親は嬰兒を抱き締めて涙を流した。辺りが明るくなり、暖かい空気が感じられた。やがて、一人の天女が顕れた。天女は亜希子に深く頭を下げた。母子を連れ、天に昇って行った。亜希子は両手を合わせ、母子の冥福を祈った。少しするとガイドの女性がやって来た。

「*****」(あなたが戻って来ないので、心配になって来てみました。わたし、少し体調が悪かったのですが、先ほど急にからだは暖かくなってきて、直ってしまいました。不思議です。あなたはだいじょうぶですか?)

「*****」(ありがとうございます。大丈夫です)

亜希子は自分が倒れたことは口にしなかった。

今日はもう引き上げようと思った。外に出ると、雨が上がって太陽が出ていた。亜希子は「このメモリアルにしがみついている霊を必ず、全て解放してみせるわ」と心に誓った。

門前仲町

賢と梓は、出迎えの人々の最前列に居る登喜子と愛子の所に行き、頭を下げた。

「お帰りなさい。長い間ご苦労様でした」

「おかえりなさい」

愛子の元気な声を聞くのは久しぶりだった。

「行って参りました」

賢が応えると、登喜子はEXITの方を覗き込むようにしながら言った。

「亜希子が見えないようですが、まだ税関を抜けてないのかしら？」

愛子も辺りを見廻している。賢は神妙な顔で応えた。

「亜希子さんは、帰ってこられません。残念なことですが、途中で失踪してしまいました」

登喜子の顔色が変わった。愛子も驚いたような顔をした。

「な、なんと仰いました？失踪してしまった？どうして、連絡して下さらなかったのですか？」

「お話しにくいこともありますので、どこかあまり人の居ないところでお話しさせてください」

登喜子は身体を震わせている。

「わかりました。附いて来てください」

青ざめた顔で言うと、賢たちに背を向けて歩き始めた。愛子は賢の近くに留まった。賢は登喜子に構わず、既に外に出ていた長谷部と小塚の所に行った。梓が賢の後を追ひ、愛子もその後を附いて行った。ふたりの男性とその両親が賢と梓に頭を下げた。

「出張ご苦労様。明日、会社で会おう。出張の報告は、内容の整合を取ってからすることにしよう。今日はゆっくり休んで、疲れを取ってな」梓が言った。

「君たち、出張の内容を整理しておいてね。明日付き合わせをするから」2人は返事をし、賢と梓に頭を下げてから、スーツケースを乗せたカートを引いて、両親と共に鉄道のホームに通じるエスカレーターに向かって去って行った。登喜子がビルの出口で待っていた。3人が来たのを確認してから、車の前で待っている運転手に頷いた。運転手がやって来て、梓の荷物を引いて行った。3人は後に附いて行った。運転手がふたりの荷物をトランクに積み込むと、登喜子が言った。

「主人が待っています。主人の前で説明してください」

「はい、わかりました」

梓は、視線を上げなかった。登喜子と愛子、梓が後部座席に座り、賢が助手席に座った。登喜子はそれ以降一言も口をきかなかった。

運転手は成田市内のレストランに車を停めた。藤代肇は一人で待っていた。登喜子の後に従って3人が入って行くと、藤代は立ち上がった。

「やあ、ご苦労様。大変だったな。まあ、座って・・・あれ、亜希子はどうした？」

藤代は賢たちをねぎらってから、登喜子の方に顔を向けて言った。

「内観さんから伺ってください」

登喜子のやや強い口調に、藤代は尋常でない雰囲気を感じ取ったようだった。

「内観君、亜希子はどうしたんだね？」

「はい、社長、亜希子さんは途中で失踪してしまいました」

「えっ？何を言っているんだ。あれほど注意するように言ったじゃないか」

「はい、注意をしておりましてし、そういうことのないように説得も致しましたが、僕の力が及びませんでした」

藤代は黙ってしまった。気まずい沈黙の時間を経て、漸く藤代が言った。

「きみ達は、途中で連絡を絶つただろう。それはどういう訳だね？今になって、亜希子が失踪してしまったと言うのは話にならん。なぜその時に緊急で連絡してこなかったのだね？」

「申し訳ありませんでした。我々は、ストックホルムで何者かに命を狙われていると感じました。どうも、我々の行動を予測したように、追跡され始めました。まだ、亜希子さんも一緒に行動しているときです。亜希子さんも危なかったのです。もしかすると、電話の傍受をされている可能性があると考えたのです。それで暫くの間、同行した長谷部、小塚の2人に任務の指示を出して、彼らと別れ別行動を取りました。インドのデリーで再会して、それからは一緒に行動を取りましたが、本社への連絡は一切行わないことにしました。リスク管理のためです。帰国後にご説明申し上げるつもりでした」

「それにしても、亜希子が失踪したことについて、連絡するくらいのこととはなんとでもなっただろう」

「何とか連絡できないかと考えましたが、鹿児島島の経験から、亜希子さんの失踪は、尋常の方法で帰還させることはできないと思いましたので、まずは自分たちの身の安全を図ることを第一優先に考えました。亜希子さんの帰還については、今回の任務を果たした後で、取り組もうと考えました。至りませんで、申し訳ありませんでした」

「やはり、亜希子と一緒にやるんじゃないか」

「わたくしも、今度の出張には反対でした。あなた、どうでしょう」

「いずれにしても、君の責任で亜希子を帰還させてくれ。我々にはどうすることもできない。それに、出張での経過報告の中断については、社内だけの問題ではない。文部次官にも釈明しなくてはならない。そのつもりでいてくれ」

「申し訳ありませんでした」

「これから、客先に向かわなくてはならない。申し訳ないが、君たちは電車で帰ってくれないか？」

「はい、そのつもりでおります」

藤代に言われて、運転手は3人を京急の成田駅まで送った。愛子は車から降りると、「ありがとうございます」と礼を言った。登喜子が軽く頷いた。賢と梓は、藤代夫妻が立ち去るのを見送った。15分ほど待つと、京急の特急に乗ることができた。電車は帰国した旅行客で混んでいた。愛子が席を一席確保した。愛子は梓に座るように促した。梓は遠慮したが、賢にも促されて、スーツケースを脚の間に挟むようにして座った。賢と愛子は入り口の横に立っていた。

「賢パパ、藤代のおじさんたち怒っていたね」

「うん、それはそうだろう。大切な一人娘が、帰って来なかったんだから、怒ると謂うより、悲しかったんだと思うよ。申し訳ないことをした」

「賢パパの所為じゃないよ」

「だけど、可愛そうだ。特に奥様が、悲しさを堪えているのが分かって、本当に済まないと思った」

「賢パパ、今度も帰還に取り組まなくちゃならないね。だけど、亜希子さんは失踪してまで、苦しんでいる人たちを救いたいのかな」

賢はただ「うん」と応えただけだった。途中、青砥の駅で空席が出来、3人が並んで座ることができた。賢と梓の間に愛子が座った。

「田辺さん、疲れたでしょう。落ち着いたら、お話を聞かせてくれますか？」

「もちろんよ。明日にでも、あなた達の家に向うわ」

賢と愛子は日暮里駅で梓と別れた。賢たちが門前仲町のマンションに附いたのは6時20分頃だった。

「おかえりなさい」

原が部屋の入り口で出迎えてくれた。

「ただいま帰りました」

部屋に入ると、原が言った。

「賢さん、ご苦労様でした。お疲れになったでしょう？ 亜希子さんは青山に帰ったのですか？」

「彼女は途中で失踪してしまいました。今回は心身共に疲れしました。そのことは後で詳しく話します。それより原さん、大変だったですね。工場の方は大丈夫ですか？」

「一応、修理は終わりました。塀の改装はもう少し掛かりますけど。被害がそれだけで済んで安心しました。多分、嫌がらせでしょう。オーラビジョンの売り上げの伸びが凄まじいので、我々の邪魔をしようとする者が出てくるのは予想されるところです」

「原さん、物質転送機はどうなりましたか？ 僕はあれが一番楽しみです。あの機械が出来たら、物流の仕組み、いや社会全体の仕組みが変わってしまうと思います。最終的には乗り物も要らなくなってしまいます」

「賢さん、この間お見せしたように、あのマシンは時空間の次元を変える機械です。机の上ではできるのですが、遠く離れた場所に同一次元の場を作る方法が思い付かないのです。あれから進んでいません。有機物のバイロケーションはできるようになりましたけど」

「そうですね。そんなに簡単に物質転送機が出来たら、何か恐ろしいことに使われそうで、怖い気がしますからね」

「賢さん、その辺は心配しないでください。得意の安全機能限定と、同じ機械が2台と出来ないように、解読不可能な暗号化キー・ロジックを組み込みますから、他社は絶対真似できませんよ」

賢と原は、けらけらと笑った。愛子はきょとんとしていたが、賢に言った。

「賢パパ、おみやげは？」

「おおそうだ。この袋、原さんと、愛子のふたりにしか買って来なかったんだ。だから、みんなに言わないでな」

賢は愛子と原に紙包みを一つずつ渡した。原が紙包みを開けると、琥珀のバラの彫り物が附いたネックレスが出て来た。

「これ、僕のですか？」

愛子が紙包みを開けると、同じ琥珀の飾りの付いた金のタイピンだった。

「これ、原さんへのおみやげじゃない？」

賢が言った。

「これからの時代は、男が女の要素を持ち、女が男の要素を持つ。そういう時代なんだ。君たちにはその先魁となってもらうために、この土産をえらんだんだ」

ふたりは自分のもらったみやげをじっと見つめていたが、作り笑いをして礼を言った。賢が言った。

「冗談だよ。袋を間違えて渡しちゃった」

愛子と原は笑った。にこにこしながら土産を交換した。愛子はそれを胸に当ててみた。原は「次に背広を着るときに付けてみます」と言った。翌日の会議は賢にとって、針の筵だった。朝一番で梓と長谷部・小塚を連れて社長室に報告に行った。藤代は不機嫌だった。総務部長との話し中ということで、社長室の前で10分間も待たされた。社長室の中からは笑い声が聞こえてきた。半開きのドアの間から話の内容が漏れ聞こえてくる。どうやら、ゴルフの話をしているようだった。総務部長が出て来たが、賢と梓をちらりと見ただけで、無視するように自分の席の方に歩いて行った。賢と梓、その後ろに附いて長谷部と小塚が社長室に入った。賢が挨拶した。

「おはようございます。出張から帰りましたので、報告に伺いました。昨日、社長には・・・」

「君、公私混同をしないでくれたまえ」

「はい、昨日の3時に成田空港に帰国いたしました。今回の出張の報告をいたします。まず・・・」

「詳細は後でいい。レポートをまとめて提出しなさい。この後の報告会で聞かせて貰う」

「あの、まだ報告書ができあがっていませんが・・・」

「なに！毎晩、遊び歩いていたのか？飛行機の中だってあるだろう！」

「申し訳ありませんでした」

「もう、いい！会議で聞かせて貰う！」

4人は頭を下げて会議室を出た。藤代の辛辣な言葉に梓はいらついた。しかし、賢は全く気にしていないようだった。長谷部と小塚は、恐ろしさに身を縮めていた。社長室を出ると、総務部長が4人の方をちらっと見た。長谷部、小塚と別れて、賢と梓はプロジェクトルームに戻った。楠木が居た。

「お帰りなさい。大変でしたね。調査はうまくいきましたか？」

「留守して済まなかった。なかなか難しかったよ」

「ところで、どうして途中で我々との連絡を絶ったのですか？」

「ストックホルムで危険な目に遭ってね。どうも、我々を狙ったと思われる攻撃が続いたんだ。それが、どう考えても、相手が我々の足取りを知っているとしか思えなかったので、コミュニケーションの遮断によるリスクヘッジを決めたんだ。それから、危険はあったけど、それは我々を意識して狙ったものじゃなかった。だから、ストックホルムの決断は正しかったと思っているよ」

「そうだったのですか。しかし、社内にはリーダー達に対する不信感と反発が漲っていますよ。と言うのは、リーダー達と分かれた長谷部、小塚両君からは毎日の様に連絡が入っていましたから。注意した方がいいと思います」

「ありがとう。覚悟はしているよ。これから、ステアリング・チームへの報告会だろう。今日のテーマは？」

「もちろん、プロジェクトの経過報告を先にやりますけど、その後で、リーダーに出張報告をやって頂きたいのですが」

「まだ、報告書がまとまっていないよ」

梓が言った。

「リーダー、概要だけはまとめてあります。それをベースにして、口頭で説明されてはいかががでしょうか？」

「田辺さん、ありがとう。それは助かる。事前に資料を見せてもらえる？」

田辺は、バッグからPCを取り出し、電源を入れた。USBメモリーを挿入して、報告書を開いた。全部で10頁ほどにまとまっている。賢は、サッと目を通した。

「うん、大体OKだな」

それから10分ほどして会議が始まった。この日のステアリング会議には藤代社長以下、ほとんどの重役が出席していた。報告内容に投資に関する文部科学省との交渉結果の報告があるためだった。MIプロジェクトが提案した設備投資計画案に対する政府の見解が示され、それについて東領製作所として答申をする必要があった。プロジェクトチームがこの会議をトップの指示を仰ぐ場と位置付けたので、重役達は出席を余儀なくされていた。プロジェクトチームのメンバーはいつものように控え席に並んで座った。リーダーである賢が挨拶をし、開会を宣言した。しかし、いつものように場が凜としない。話し声はないのだが、意識のざわつきを賢は感じていた。初めの議題であるプロジェクト進捗報告を、賢は久保蔵に引き継いだ。久保蔵は文部科学省との折衝の結果を報告した。社長に頭を下げ、営業を感じさせるへりくだった話し方をした。文部科学省が認めた予算額は当初計画した見込み額の半額だという報告だった。久保蔵は結局、全県に展開する予定だったバーチャルシステム館を、半分以下に減らさざるを得なくなるという説明をした。全都道府県に少なくとも1棟建設するという当初の計画が次第にトーンダウンしてきていることに対して、藤代は何も言わなかった。バーチャルシステム館の建設予定地の絞り込みを行いたいという久保蔵の説明に、誰も異論を唱える者はいなかった。それは、賢が予算化の段階で、HUB県の構想を出していたが、それに近い形で進めることに決まった。それより寧ろ、いかにして、その限定した数のバーチャルシステム館を使って意識改革を全国規模で行うかという話に矛先が向いていた。次回のステアリングメンバーによるフォロー会議までに、プロジェクトチームが文部科学省に対する、改善案答申の草案を用意することになった。ここで、久保蔵は司会を賢に戻した。賢が話し始めた。それまでしんと聞いていた出席者から、ざわめきが聞こえてくる。

「続きまして、海外出張報告をさせていただきます。これはアメリカ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、オーストラリア、インド、中国の国民の意識の現状と改革への取り組み、およびその問題点を調べることを目的とした出張です。出張者はプロジェクトより、田辺副リーダー、長谷部主務、小塚主務、そしてわたくし内観です。8月XX日から昨日まで、XX日間の出張になりました。その間、プロジェクト推進業務に参画できませんでしたことをお詫び申し上げます。また、今回の出張では、途中、わたくしと田辺に附いては、身の危険を感じる出来事が続いたため、不本意でしたが、長谷部、小塚両君と行動を別にし、本社とのコミュニケーションを絶たせて頂きました。昨日の夕方帰国したばかりですので、まだ、報告書がまとまっておりません。従いまして、概要の報告とさせていただきます」

藤代は賢の話の全く聞いている様子はなく、隣の一之瀬専務の方を向いて何か話している。賢は藤代が話し終わるのを待った。1分ほど藤代は話していたが、話し終わっても賢の方を見るのではなく、机の上の書類に目を向けた。場が白け気味になった。賢は話の続きを始めた。

「それでは、アメリカの・・・」

突然一之瀬専務が言った。

「君は、我々を馬鹿にして居るんじゃないか？幾ら自分が空を飛んだり、空中から食べ物を取り出せたりするからと謂って、我々との連絡を絶つ理由にはならないだろう。少なくとも社の一員として業務をしているんだから」

「はい、その点は申し訳なく思っています。しかし、スウェーデンでの出来事をご確認頂ければ、それが我々を狙った襲撃だと、ご理解頂けるはずです。相手は、我々の行動をあらかじめ知っているような、動きをしていました。本社との通信を傍受しているか、どこかから情報が漏洩していると考えて、リスク回避の行動をとりました」

「ストックホルムの支店長の運転していたリムジンが狙撃されたことか？それとも、空港での爆破事件のことか？」

「はい、それらが我々を狙った攻撃であることは明白でしたし、我々の

車は常に尾行を受けていました」

「浮島支社長は、そんな風に言っていないが、君の思い込みじゃないのかね。浮島君は彼を狙撃した犯人が逮捕されたと言っているよ。ドイツ人の過激派だということだよ。彼の運転する車に、どこかの要人が乗っていると勘違いしたようだよと言っていた。彼は、君がインド人のグループを疑っていたが、インド人は全く関係なく、彼らが接近してきたのは、当社との取引を増やしたかったからのようだ。君はインド最大の商社TUTU商事の社長との名刺交換も、拒否したそうじゃないか。後で、社長のチュダンピラン氏が、今後当社との取引を増やしたいと言ってきたと浮島君が言っていたよ。君の不適切な行動の尻ぬぐいのために、浮島君が苦労したようだよ。それに、あの空港の爆破事件について、警察は過激派の仕業と断定したようだよ。スウェーデンの首相が翌日渡米する予定になっていたのを、阻止するのが目的のようだとニュースで説明していたよ。君は自意識過剰なんじゃないかね。もっと冷静に事に当たらなくては、MIの様な難しいプロジェクトの舵取りは難しいだろう」藤代が頷いている。他の出席者も賢に対して疑惑を持ったようだった。賢は言った。

「インド人達による我々の追跡は執拗でした。特に私と社長のお嬢様亜希子さんへの追跡が執拗でした。私たちが前回インドに出張した際に、売春宿の爆破事件があり、丁度そのとき、インドにはその行動が疑われる日本人がかなり滞在していたようで、日本人が爆破の実行犯として疑われているようなのです。特に私と亜希子さんの居たコルカタにある売春宿の爆破が酷く、その時コルカタには日本人の滞在者が多かったのかも知れません。どうもインド人の売春組織の者達が日本人に焦点を絞って、狙っている様なのです。我々が海外出張しているときも、日本人に対しての襲撃が相次いでいました。ストックホルムでも我々に対してのインド人の近づき方が尋常ではありませんでした。あのインド人達は、我々が1月前にインドに出張していたことを知ってから、我々を疑い始めたようなのです。それから執拗な追跡が行われ、狙撃事件が起きたのです。我々は長谷川君達を巻き込みたくなかったのと、業務に支障をき

たさないため、彼らと別行動をとり、電話の傍受や、情報の漏洩を避けるため、あえて本社との連絡を絶ったのです。犯人がドイツ人と謂うことはどうしても解せません。多分真相は別だと思います」

一之瀬が言った。

「君の話は要領を得ないな。一体誰がインド人に対して、君たちがインドに出張したなどと教えたと言うんだね」

「その人の名誉のために、申し上げられません」

「話にならん、もしそれが事実だとすれば、それを言わない限り、君の言葉に信憑性は無い」

「はい分かっております。でも私その人の名前を言っても、その人は言っていないと思います」

「分かった、もういい。いずれにしても、出張で何を調べて来たか報告しなさい」

梓がPCを操作し、先ずアメリカのアリゾナ州の報告の頁を表示した。

賢は、少しも動ずることなく話し始めた。

「はい、それでは、先ずアメリカから報告いたします。先ず、フェニックスのマリコパ郡庁舎を訪問しました。ここでの意識改革プロジェクトの取り組みですが、結論から申し上げますと、まだ実効が出ていないようです。国全体まで浸透する段階に至っていないと言った方がいいかもしれません。あまり、成功しているようには見えませんでした。我々はそれから、老後の安定した生活を提供するために、民間企業が建てた、サンシティという人口38,000人程の町を調べました。一人暮らしの老人を通して、サンシティという町の特性を見ました。この町には老人が生きるために必要なものはほとんど用意されていましたが、活気がありませんでした。大きな老人ホームのような町でした。物質的に全てが整っていても、人が本来の意識的な生活をする為には、これだけでは十分でないことが分かります。意識改革の結果として求めるべき姿ではないと感じました。我々は次に自然と一体となった生活様式と、考え方を学ぶため、ナバホ・インディアンの家を訪れました。ナバホの人々は、自我を捨てること、世界全体を認識すること、我慢すること、全てを清

らかに保つことという4つの信条を大切に生きています。ナバホには文字の文化はありません。その代わり、絵を描きます。砂絵が有名ですが、あれは意識の捉えた生きる道のようなものを描いているのです。彼らは意識に重点を置いた生き方をしていました。しかし、現在の我々が、彼らと同じような生き方ができるかという、それは難しいと考えます。ただ、あの生き方が、一つの方向性を示しているように感じました。それから、我々はストックホルムに飛びました」

そこまで話すと、笹塚常務が言った。

「君は前回もアメリカン・インディアンを訪問したんじゃないかね。どうして、何度も訪問するんだね。アメリカン・インディアンとつながりでもあるのかね」

「はい、私は幼少の頃、フェニックスに住んでいましたから。アメリカン・インディアンには何人かの友達が居ます」

一之瀬が言った。

「空を飛んだりするのは、インディアンから教わったのかね。私は、君が熊野の山奥で修行でもしていたのかと思ったよ」

賢を嘲笑する一之瀬の言葉に、出席者がどっと笑った。しかし、全く笑わないものも2、3人居た。賢はその人たちの顔を認識した。賢は一之瀬の揶揄には応えずに説明を続けた。

「それでは、ストックホルムでの調査内容を報告させていただきます」

報告はそれから暫く続いたが、藤代は報告の間一言も話さなかった。一之瀬が、時々賢の言葉尻を捉えたような発言をした。しかし、賢は少しも怯むことなく、淡々と出張報告を続けた。賢の動じない態度が逆に一之瀬の気持ちを逆撫でしてでもいるかのように、一之瀬は執拗に賢に対して否定的な発言を繰り返した。

「君の報告は、調査じゃなくて、観光といった感じだな。そんな内容なら、わざわざ高い金と時間を使って海外まで行かなくても、インターネットで調べるだけで十分じゃないのかね」

「我々も、事前にインターネットでの調査も致しましたが、やはり、現地の人の方の考えていることは、直接会って聞かないと本音が分からないと

思います。特に今回の出張では、アメリカ、スウェーデンでは公務員と住民の意見を聞き、世間が考えている内容と対比することができました。貴重な体験だったと思います」

「それで、世界では意識改革への取り組みが十分に行われていないと言いたいのかね」

「はい、そう感じました」

「君の意見だけじゃ、はっきりしたことは分からないな。君と一緒に行ったのは、サブリーダーの田辺君だったな。君はどう感じたんだね？」一之瀬は田辺の方を見て言った。田辺は一旦賢の方を伺ってから、立ち上がるとそれに応えた。

「わたくしは、内観リーダーと同行させて頂きましたが、先ほどリーダーが説明したとおりだという印象を受けました。今回訪問した国々では、そこに住んでいる人たちは物質中心の生き方から抜け出していないように思われました。まだ生きることに必死で、保健や福祉といったことに視点が注がれていました。特にスウェーデンの様に生涯福祉という点で先端を行っている国でも、そこに生きている人たちの精神的な安定を図るような、具体的な取り組みは目にすることができませんでした。インドのようにあらゆる思想が育ち、社会も人間から動物までが渾然一体となったような国でも、物質的な発展に軸足が置かれているようでした。中国に至っては、唯物的な思想を背景に持つ政党が一党支配しているということもあって、国民に対して、儒教など道徳を元にした精神的な改善を図ろうとする行為は認めようとしませんし、身体を動かすことで、肉体と精神の安定を図る気功の練功なども、おおっぴらにはできなくなっています。極端に肉体偏重で、太極拳などの例では、精神的な面は表面に出すことができず、体操というスポーツの一種という位置づけにまで落とされています。このように精神修養の分野では最も歴史が古く、様々な偉人を輩出し、世界中の精神的な発展を支えてきた国々が、精神性の改革という面では停滞どころか、逆行しているのが現状です」藤代が言った。

「田辺君、君はなかなかよく現状を把握できているようだね。内観君に

も見習って欲しいものだ。君から、内観君によく説明してやってくれ」
田辺は、勇気を振り絞って言った。

「社長、わたくしの説明は、全て内観リーダーから教えて頂いたことです。内観リーダーの深い洞察力には、わたくしなど足下にも及びません」
藤代は苦笑いをして黙ってしまった。重役連中が賢に対して、否定的な感情を抱いているのは明白だった。しかし、賢は最初から最後まで淡々としていた。会議が終わって、プロジェクトルームに戻ると、田辺が言った。

「リーダー、わたくし我慢できませんでした。あれほど酷いことを言われて、リーダー何ともなかったんですか？」

「重役連中は多分社長の考えに従っているのだろう。この出張は最初から、僕に向けての尋常でない意思表示があっただろう。だから、今日の会議は当然の成り行きだよ」

楠木が言った。

「やはり、リーダーがおっしゃっていたとおりにになりましたね。私は全都道府県に少なくとも1棟のバーチャルシステム館を建てるべきだと思っていましたが、まさか、予算が削減されるとは思いませんでした。リーダーはその点も考慮されていたのですか？」

「うん。日本政府の保守的な意識では、未知なものに一気に取り組むなんてことはできないと思うよ。それが、精神的なことをテーマにしたプロジェクトであればことはもっと複雑だ。あの原水爆禁止運動でさえ、政府の耳に国民の声が聞こえてくるのに50年あまりの年月が掛かっているんだからな。外国が最初にやらなくては、この国の政府は何もできないんだよ。非核3原則を提唱するスタンスだって、アメリカの顔色を窺いながらだっただろう。だから、今度のプロジェクトだって、国民に説明できるようにするために、バーチャルシステム館はプロフィットを意識していないと、途中で梯子を外されてしまうよ」

「さすがにリーダーですね、読みが深いです。田辺さんが賞賛するわけです。私にはそこまで考えが及びません。それにしても、今日の重役連中はどうかしていましたね。なぜ、あれほどまで、リーダーのことを攻

めたんでしょう？専務なんて、初めから、意図的にやっているとは思えませんでした」

「亜希子さんのことが原因だと思うよ。出張中の失踪だから、当然矛先が僕に向くよね。仕方ないことだよ。社長も2人の娘さんの行方が分からなくなったんだから、尋常な精神状態でいられるわけないよ」

その日の午後、賢は文部科学省政務次官に出張報告するために田辺を伴って霞ヶ関に出掛けた。賢の報告に対して、政務次官は露骨に不快感を顔に現した。特にアメリカのプロジェクトが進展を見せていなく、このまま行くと暗礁に乗り上げるだろうとの賢の説明に不機嫌になり、それ以降の報告について、ことごとく厳しい非難の言葉を投げかけてきた。政務次官の望んでいた、アメリカを中心にした精神改革運動の展開のようなストーリーは描けそうにないことが明白になったためだった。予想していたとおりのだったので、賢も田辺も内心納得したような妙な感覚を覚えた。霞ヶ関から戻ると、田辺は正式な出張報告書を作成し始めた。賢は、久保蔵と打ち合わせをした。どういう訳か、久保蔵の席は総務部長の隣に設けられていた。久保蔵はプロジェクトルームに入って来ると、賢に向かって言った。

「今日はお疲れ様でした。専務も厳しい人ですね。内観リーダー、決済関連の業務は全て処理してあります。しかし、新たに発生した件は問題が大きすぎて手を付けられませんでした。そのままになっています」

3つの大きな問題があった。一つは、プロジェクトの支部の設置だった。札幌、仙台、名古屋、大阪、高松、広島、北九州、長崎に支部を設ける件で、どのような形態にするかという点が未解決だった。誰も具体案を示すことができなかった。それは社長の指示であるバーチャルシステム館のプロフィットを想定することができなかったため、運営的に負担のみが増加することが原因だった。各支社は支社内の一部門として運営機関を設けることには難色を示していた。各支社の運営は本社とは独立した形態を敷いていたので、支社が合意しない限り、新たな組織を支社内に設ける話は進まなかった。2番目はバーチャルシステム館の運用形態だった。政府は民営機関にする意向だったが、プロジェクト各社は各

都道府県に運用責任を持たせる方向を考えていて、その調整が進んでいなかった。3つ目は賢の提唱していた、試行サイトの建設計画だった。当初賛同していた議員や事務方も、具体的なイメージが掴めない上、投資金額が大きくなることを懸念して、及び腰になってきていた。社内の反対派はこのときとばかり、白紙撤回させようとして根回しを始めていたが、当初賢の案を容認していた社長が、強い反対の意思表示をしないことと、連携5社との調整ができていなかったため、誰も表立って反対の意思表示ができずに、くすぶった状態だった。これをはっきりさせなくてはならなかった。賢にとって、支部の件は非常に簡単だった。先ず、出張前に田辺に作成させたバーチャルシステム館の運営計画案を再びレビューしてみることにした。その案は、運用プロジェクトが設立を計画している運用会社の支店と東領製作所の支社とが共同出資して運用会社を設立し、共同運用するというもので、各バーチャルシステム館は全てプロフィットセンターとしての任務も併せ持つ形にすることだった。社長の藤代がこだわっていたのは、プロフィットセンターにすることで、建設と運用の責任を5プロジェクトに負わされることへの懸念だった。賢の計画はバーチャルシステム館を独立した施設とせず、民間のテーマパークや遊園地などに併設して、運用を連動させ、そこの集客力を流用することだった。また、そのバーチャルシステム館の近隣に、美術館などの施設があることも、理想的な立地用件であるとしていた。それには土地買収などの点で、困難さもあったが、一番重要な入場者数を期待することができた。独立した施設を辺鄙な所に建てた場合、入場者数の漸減が起きることは、賢にとっては想定されることだった。賢はその考え方をまとめ、楠木、梓と共に社長室に出向いた。事前に用件を伝えてあったので、藤代は普段通りの対応をした。しかし、常に視線は賢から外していた。

「それで、プロフィットは出せる見込みなのか？」

賢が応えた。

「試算では、オープン当初の収益は、問題ないと思われていますが、その後は、積極的な集客運用を図ることで、収益を確保する計画にしてありま

す。定常運用に入る半年後から、美術館や遊園地のイベント、独自に撃つバーチャルシステム館としてのイベント、集客のための特別企画などを織り混ぜて、常に人々を惹きつける為の手を打つ必要があると思います。それらの具体的な企画と運用を、新たに運用プロジェクトと共同で設立する会社に行かせます。その会社には当初、施設の土地・建物・設備の投資費用を貸与し、運用の負担を軽減させます。法定償却は政府が主導して設立して貰う公益法人にて行って貰います。土地、建物、設備はその公益法人から貸与する形態にします。運用はあくまで、設備の維持費、光熱費、人件費、消耗品費、その他諸経費、借入金の返済と利子の支払いの中で利益を造出して貰います。計画ではバーチャルシステム館設立後、5年間はプロフィットが出せる見込みとなっています。その後の5年間で新会社に自助努力もしてもらい、固定資産の償却を開始して貰います。8地域について個別の事業計画案を策定してありますので、ご一読頂きたいと思います」

「分かった。結論は後で総務部長から聞いてくれ」

3人は社長室を出て、プロジェクトルームに戻った。楠木が独り言のように言った。

「なぜ、総務部長が出てくるんだろう。何もしない人なのに」

「まあ、いいじゃないか」

賢が、苛立っている楠木を慰めるように言った。その日はプロジェクトの主要メンバーが集まり、夜遅くまでバーチャルシステム館の運用について討議を行った。全員が、賢の事業計画案の実現に確信が持てるようになるまで、討議を繰り返した。会議が終えた時は10時半を廻っていた。

賢と梓は疲れていた。ふたりはそのまま自分たちの寝城に帰った。

マンションに帰ると、愛子が食事の支度をして待っていた。

「愛子、お腹が空いただろう、先に食べていけばよかったのに」

「賢パパ、梓さんは来ないの？久しぶりに賢パパと一緒に夕食だから、待っていたの」

食事をしながら、賢は愛子に言った。

「長い間留守にしたけど、大丈夫だったか？」

「私はもう大丈夫。原さんがお兄さんみたいにしてくれるから、安心よ」

「それはよかった。ところで。あの友達、水口君は遊びに来ているのか？」

「近頃はあまり来ないわ。私がロシアに留学すると言ったので、ロシア語を勉強するとか言っているわ。私は、自分の希望に向かって努力した方がいいって言ったんだけど、どうしても私と一緒に留学したいんだって」

「そうか、留学するんなら愛子だって言葉の問題があるんじゃないか？」
愛子は席を立つと書棚からロシア語の教本を持って来た。

「見て、ちゃんと勉強している。賢パパ、心配ご無用！」
そのとき、原から電話が掛かってきた。愛子が受話器を取ったが、自分にでなく賢への電話だったので、少し拍子抜けしたようだった。

「賢さん、できました。終にやりました」
賢は何の話だろうと思った。

「二つの離れた場所に、共通空間を作ることができたんです。次元の重量の問題だったんです」

賢は漸く原の話が見えてきた。

「それじゃ、離れた場所でも転送できるようになったんですか？」
「ええ、そうなんです。試しに、バスルームと部屋の間でやってみました。壁も関係ありませんでした。もちろんそうでしょうけどね」

「それは凄い。今から、こっちに来れますか？」
「まだ、装置がまとめてないので、僕のアパートに来てくれませんか？」
賢が原のアパートに行くと言うと、愛子も附いて行くと言い張った。11時半を過ぎていたが、ふたりは原のアパートに向かった。入り口で原が待っていた。目を瞑っていても分かる、住み慣れたアパートに一歩足を踏み入れて賢は驚いた。部屋の中は賢が住んでいたときと全く変わっていた。壁際には測定器がずらりと並んでいて、床の上には辺り一面、配線と電子部品のモジュールが散乱している。ベッド以外には人の立ち入る隙間も無いほどだった。ふたりが部屋の中に入ると原が言った。

「ベッドに座ってください。そこしか空いてるところ無いですからね」

原は床の空いているスペースを見つけ、島伝いに、つま先立ちで中に入って行った。賢と愛子も原を真似て、後を附いて行き、ベッドの上に座った。

「賢さんいいですか、これから僕はバスルームに行って、歯ブラシを置いてきますから、見ていてください。そのベッドの横にある皿の上に歯ブラシが出て来ますから」

皿とは謂っても、そのトレイの下に台があり、その台から無数の配線が出ていて、所狭しと置かれている電子モジュールに繋がっている。そのモジュールはデスクトップ・パソコンのCPUボードほどの大きさで、それが30枚ほどトレイの下の台にケーブルで接続されている。

「原さん、こんなに沢山の回路部品、どうやって作ったんですか？」

「実際にゼロから作ったのは3枚だけです。後は測定器や、医療機器のモジュールを取り出して使っているんです。オーラビジョン・システムの収益のおかげで、研究に結構投資できていますから、お金を出せば、機能の高い部品も手に入るし、いい仕事をしてくれる会社も結構あるんですよ」

原はバスルームに向かう途中で、測定器の横にある大きな電源装置のスイッチをONした。キーンという音が聞こえ、その音が次第に高音になってゆき、聞こえなくなった。原は洗面台の棚から歯ブラシを手にとると、バスルームに入って行った。バスルームの周辺にも沢山の電子部品のモジュールが置かれている。バスルームの中にも別のトレイがあるとのことだった。賢と愛子がベッドの横のトレイを見つめていると、そのトレイの周囲の空間に違和感を覚えてきて、トレイの上にぼんやりとした棒の様な影が顕れ、それが歯ブラシの形になった。それはブラシの毛が折れ曲がった使い古した歯ブラシだった。賢が言った。

「原さん、出てきましたよ！」

原がバスルームから叫んだ。

「うまくいったでしょう。今、そっちに行きます！」

原はバスルームから出て来ると、途中で電源ユニットのスイッチを切った。先ほどとは逆に次第に高音の音がし、その音が低くなって行って電

源ランプが消えた。

「原さん、すっごーい！やっぱ、原さんは天才ね」

愛子は眠そうな目をこすりながら言った。原がベッドサイドまで来ると、賢は微笑みながら言った。

「原さん、よくやりましたね。難しかったですでしょう。世界が変わりますよ」

「賢さん、もう分かっているでしょ。僕は物質の方の役割をしているんです。賢さんが意識の方の役割をしてくれているでしょう。変わるんですよ、世界は」

「そうは言っても、まだ、誰も理解できないだろうな。次元の制御なんて」

「そうですね、これまで築き上げてきた社会科学の常識を捨てないと、こういうマシンは出来ませんからね。今の科学者が見たら、出鱈目だと思ふようなことを、確率的処理プロセスとして、当然の様に使っていますからね」

「しかし、その常識を覆す考え方の基礎を構築するのに、白紙と謂うか、無と謂うか、そういう状態に一度帰納させるのは、難しかったですでしょう。そこからの新しい概念の構築でないと、こんな装置は出来ないでしょう」

「賢さんも同じと思いますが、自分の頭の構造がそうなっているようです。勿論、全てゼロに戻してから、新しい理論を構築しています。そのとき、現在の科学が生み出した理論で使えるものと使えないものがあるのが見えてきます」

「いつ、市場に出せますか？」

「量産までにはあと1年ください。それまでに試作機を何台か造ります。それをプロモ（広告宣伝）に使うといいでしょう。暗号化を各所に組み込まないとイケませんから。少し頭の切れる新人を5人ほど雇って、製品化を手伝わせます。それに、ここじゃあもう無理ですから、研究所を作りますよ」

愛子はちんぷんかんぷんな話を聞いていて眠くなったようで、いつの間にか原のベッドの上に横になり、寝入ってしまった。賢は愛子を揺

すって起こすと、寝ぼけてふらついている愛子にモジュールを踏まないように注意させながら、やっとの思いで部屋を出た。愛子は賢の腕にぶら下がるようにしてマンションに帰った。

翌日、賢は3番目の問題に取り組むつもりだった。昨日、社長の藤代に対して、事業計画の説明を行ったので、1番目、2番目の二つの問題は社長の決断に委ねられることになった。賢と楠木、梓の3人は3番目の問題 — 実験サイトの計画 — について検討を進めた。昼少し前になって、総務部長がプロジェクトルームに姿を現わした。

「内観さん、社長がOKを出しましたよ。あの計画で進めていいようです。この件は久保蔵さんがリーダーになって進めるようにとのコメントを貰っています」

楠木と梓は、普段顔も見せない総務部長が突然現れて、理不尽なことを告げたことに腹が立った。楠木が言った。

「それは可笑しいんじゃないですか。内観リーダーが提案した内容ですよ。リーダーが推進するのが当然だと思います」

「わたしは、ただ社長のコメントを伝えただけですから」

そう言い残すと総務部長の柳川は逃げるように部屋を出て行った。賢が言った。

「楠木さん、まあいいじゃないか。結構大変な仕事になるから、もし担当責任になったら、他社や該当支社との折衝なんかで多忙を極め、他のことをする余裕が無くなってしまうよ。ある意味じゃ、助かったのかもしれないよ」

梓が言った。

「だけど、これはプロジェクトの要の業務じゃないですか。なぜ、リーダー補助が担当責任者になるのか解せません」

楠木も言った。

「僕が、社長に問い合わせしてみます」

賢はそれを押さえて言った。

「楠木さん、それは止めた方がいい。今は社長の機嫌が悪いから、気持ちを逆撫でしたら、藪蛇になっちゃうよ。他にも大切な業務が沢山ある

から、あまりこだわらない方がいいと思うよ。まだ実験サイトでのシミュレーション計画だって、具体化していないだろう。僕はそっちの方がずっと難しく、やりがいがあると思うよ」

楠木は賢の提案に当初から賛成しておらず、バーチャルシステム館の建設に情熱を燃やしていたので、ことさら久保蔵が責任者になって進めるということに抵抗感を覚えているようだった。梓が言った。

「リーダー、実験サイトの件は、反対派が白紙撤回するように根回ししているようです。楠木さん、あなたも反対派だったから、その辺のことは知っているんじゃないの？」

「僕は反対などしてないよ。僕はバーチャルシステムの推進派だよ。実験サイトの建設は、ちょっと現実離れし過ぎていると思ったんだ。リスクが大きすぎて、失敗に終わる危険性があると思ったので、賛成していなかっただけだよ。だけど反対派の動きはある程度は掴んでいるよ。ちょっと言いにくいんだけど、反対派はリーダーの案そのものより、リーダーに対して反発を感じていて、足を引っ張ろうとしているんだ。上層部に対して「実験サイトの建設におけるリスク」という報告書を出しているんだ。社長までは届いていないようだけど、専務はその報告書を見ているらしい。やり方が卑劣だよな。会議の席で正々堂々と意見を述べればいいに、そういうことはできない。重役の顔色を窺っているんだ」楠木は反対派のやり方に憤りを感じているようだった。その日の午後、第3の問題にも決着が付いた。総務部長が再びプロジェクトルームを訪れた。今度は久保蔵を同行してきた。

「社長が結論を出されました。懸案になっていた実験サイトの建設案ですが、これは取りやめとして、バーチャルシステム館に資源集中を図ることになりました。内観さんには申し訳ないですが、実験サイト案の中止について、直ぐに政府機関、事務方、5社、その他関係各社に連絡して、取りやめに同調するよう説得と調整をするようにとのお達しです」総務部長の柳川がそう言うと、久保蔵が言った。

「内観リーダー、その経過については、わたくしにご連絡頂けますか？社長が、私が経過をとりまとめて報告するようにとおっしゃいましたの

で」

久保蔵はやや高飛車な雰囲気と言った。さすがに「報告」という言葉は使えず、「連絡」と言ったようだった。賢は自分をプロジェクトの第一線から外そうとしている藤代社長の意志を感じた。そのこと自体は何等問題ないと思ったが、途中まで進めていた実験サイトの案をいきなり中止にすることはそう簡単ではなかった。既に多くの組織が動き始めていたし、候補地の検討も進んでいるはずだった。担当者からは実験サイトの為の設備についての検討が、かなり進んでいるとの報告も受けていた。楠木と梓は、重役、特に社長が賢に対してどうしてこれほどまで否定的な行動を取るのか、どうしても腑に落ちなかった。自分の娘の失踪が原因としたら、あまりにも狭量な行動だと思った。賢は楠木と梓を伴って直ぐに社長室に出向くことにした。社長秘書が「社長は外出中です」と言った。「今日は客先から直帰されます」と言った。賢は藤代の真意を知りたかった。しかし、そのチャンスは巡ってこなかった。その日、帰宅してから、青山の藤代の自宅に電話を掛けてみたが、賢が名前を名乗ると、家政婦が「ご主人様と奥様はただ今留守にしております」と言った。翌日も社長は出社していなかった。急遽九州支社に出掛けたとのことだった。賢から藤代を捉えることができなくなった。藤代の動向を透視で確認することは可能だと分かっていたが、それは止めた。前回のステアリング会議で見せた特殊効能はもう、ああいう席では二度と使わないことに決めていた。賢は一旦自分の考えを引き下げることにした。それから3日間、実験サイト建設中止の連絡と調整に明け暮れた。その業務は誰にも指示せず、賢が自ら処理した。総務部長を通しての通達があつてから、1週間で賢の提案した実験サイト建設案は廃案にまでこぎ着けた。連絡を受けた組織の半数は、当然のこのように受け止め、「最初の検討が不十分だった」と批判めいたことまで口にするものもあった。しかし残りの半数は非常に残念がった。この方法が一番妥当だと判断している者たちも多かった。中でも運用プロジェクトと数馬の属しているシステムプロジェクトは、既にフライング（先行着手）を決めていて、設備の設計を開始したり、運用案を策定したりしていた。廃案の処理が

完了した日の夕方、数馬から電話があった。

「数馬、元気だったか？亮子さんは元気か？」

「うん、ありがとう。あいつも、しっかりものの女房になったよ。来年には母親になるからな」

「おお、そうか、それはおめでとう。楽しみだな。ところで、実験サイトの件か？」

「うん、今日時間があるか？少し話したい」

「分かった。それじゃ、例のレストランで7時に会おう。梓を連れて行くよ」

「梓って、サブリーダーの田辺さんのことか？」

「そうだ。今じゃあ、彼女がいなくちゃ何もできなくなっちゃったよ」
賢は定刻に退社すると、梓を連れていつものファミレスに向かった。途中の電車の中で梓が言った。

「あなた、あれほど理不尽な攻撃を受けて、黙って引き下がるつもりですか？わたくしや楠木さんは、見ていただけませんでした」

「梓、僕が責められるのにはそれなりの理由があるんだ。たとえ相手が人を苦しめるようなことをしているからと言って、その相手に不意打ちで攻撃するのは、正しい行いではなかった。それに、その後で売春宿の攻撃のことや祐子や亜希子の所在のことで、いくつもの虚偽の報告を繰り返さざるを得なくなった。これはみんな自分に跳ね返って来る。いろいろな形で自分に同じような攻撃が向くのは、仕方ないことだよ」

「あなた、そんなこと言っていると身の危険を招いてしまいますよ。このような攻撃はできる限り、回避した方がいいと思います」

「うん、僕もそのつもりさ。全て甘んじて受けようなんて思っていないよ」

ふたりがファミレスに着くと、既に数馬が亮子と一緒に席に着いて待っていた。賢は手を振った。梓は頭を下げた。

「やあ、早いじゃないか。奥さん、お久しぶりです。お元気そうで何よりです」

「いやね、賢さん、からかわないでよ」

「賢、食事はまだだろう。一緒に食べようか？」

「そうだな。ちょっと待って、愛子と原さんも呼んじゃうから」

賢は携帯で愛子に電話を掛けた。原もマンションに居た。ふたりは直ぐに来ると応えた。

「祐子と亜希子が居ないと寂しいけど、これで、全員揃っちゃうな」

「そうだ、数馬、亮子さん、梓に会うのは初めてだろう。紹介するよ。こちらは田辺梓さん、東領製作所で僕と一緒にプロジェクトを推進している方です・・・梓、こちらは僕の親友のSHTシステム社に勤務している樋口数馬さんと、奥さんの亮子さんだ・・・梓、何か一言挨拶して」

梓は立ち上がろうとしたが、賢が「座ったままでいい」と言った。

「田辺梓です、よろしく願いたします。樋口さんとは電話で何度かお話しさせて頂きましたので、わたくしのことはご存じ頂いていると思います。現在は内観リーダーの下でサブリーダーとしてプロジェクトの推進を行っています。趣味は旅行です。世界中の国に行ってみるのが夢です。両親は北海道に住んでいます。まだ独身です。よろしく願いたします」

数馬と亮子も自己紹介をした。賢が亮子に向かって言った。

「亮子さん、おめでとう。来年だってね」

亮子は嬉しそうに微笑んだが、以前の様に顔を赤らめることはなかった。

「ありがとう。数馬さんは男の子がほしいって言うけど、私は、元気な子なら、男でも女でもいいわ。私には子供が出来ないかもしれないと思っていたの。神様のお恵みね」

梓も「おめでとうございます」と言った。

「ところで、賢、今度の計画変更は、本当のところはどういう理由なんだ。突然あんな宣言をされると、みんな東領製作所に不信感を持ってしまうぞ。俺も困惑しているよ。かなり進んでいることもあるんだぞ」

「あれは、俺の意志じゃないよ。トップの決断だよ」

「あの、藤代社長か？」

「うん。俺も、どうしていいか分からない。いずれにしてもトップの方

針に従わなくてはならないからな。一方でプロジェクトの成功は必須要件として変わらないだろう。俺としては、別の手段を探す必要が出てきたって訳だ」

「そんな、悠長なことを言っていられないぞ。もうバーチャルシステム館の建設計画は進んでいるから、あの路線はそのまま継続されるだろう。だけど、あれだけじゃ、VEAS館に毛が生えた程度の影響力しかないと思うんだ。エンタメの領域から抜け出せないと思う。おまえが言っていたように、俺も国民に対して、強いインパクトを与える事例がどうしても必要だと思うんだ」

「俺自身はまだ、あの考えを捨て切った訳じゃないよ。ただ、東領製作所の担当するインフラプロジェクトとしては、その取り組みができなくなったと謂うことさ」

「と言うと、何かいい考えがあるのか？」

「おまえは、俺たちが発売したオーラビジョン・システムのことを知っているか？」

「うん、名前は知っている。テレビで見たと言う奴が居るから、そいつらから聞いたんだけど、「あれは恐山いたこマシンだ」なんて揶揄している奴も多いようだぜ。本当に霊を呼び出せるのか？俺には実感が湧かないけどな」

「天才原智明の傑作だよ。一度見てみるといいよ。俺が言いたいのは、あのマシンには人間の意識を変革するトリガー（引き金）が仕掛けられているということなんだ」

「それはどういうことだ。霊界があると謂うことを信じさせるつもりなのか？」

「そういう概念的なことじゃないよ。「人間は永遠に死なない」と謂う意識に目覚める切っ掛けを与えることができると思うんだ」

「つまりは、あのマシンを使うと、この現世で自分が追い求めている物質的なものは、死んだときに全て消えてしまって、意識だけが残っていると謂うことが自覚できるようになると謂うことか？」

「そうだ。理解が早いじゃないか。さすがはシステムのエリートだ」

そのとき、入り口から原と愛子が入って来た。

「こんばんは。お待たせしました」

原が言った。愛子もちよこつと頭を下げ、全員に挨拶した。数馬がウエイトレスを呼んだ。皆それぞれ注文をした。数馬が原に向かって言った。

「原さん、オーラビジョン・システムという機械を發明されたのですが、本当に靈界を覗き見ることができるのですか？」

原は笑いながら応えた。

「いいえ、そんなことはできませんよ。ただ、会いたい人の姿と声を聞けるだけです。それと、呼び出す相手の意識レベルがあまり高くなければ、話をすることも可能ですけど」

賢が言った。

「数馬、自分の意識の波長を会いたい人の意識の波長に同調させる仕組みなんだ。その人を表示させてLCD上で見せる仕組みを作っちゃったのが原さんの凄いいところだよ」

「それは本当に凄いいよね。普通の技術者じゃ到底考えが及ばないよ」

原が微笑みながら言った。

「大したことはありませんよ。この仕組みはそれほど難しくありません。ただ、今までの科学の常識を捨て去ること、これに尽きますね。そこから自由に思考を展開させれば、電子関連の技術者なら同じようにできると思いますよ。だけど、最近のPCの技術だけしか理解していない技術屋じゃあ無理ですけど」

「つまりは、コンピュータ理論以外に、電磁気学とか過渡現象理論とか量子力学とか、所謂理論を理解している技術者なら、作れる可能性があるということですね？」

「それに、医学的な知識も必要です。特に脳神経学は必須ですけど」

「脳と謂うと、脳波ですか？」

「そうです。脳波を検出して、対象となる人の基本周波数と同調させ、その人の特性を含んだ脳波の高調波成分を引き出す必要がありますから」

愛子が言った。

「原さん、難しい話はそのくらいにした方がいいよ。食事が来るから」
愛子の言ったとおり、ウェイトレスが次々に食事を運んで来た。数馬はもっと聞きたいようだったが、それを察知して賢が言った。

「まずは食事にしよう。女性達も居ることだし、話をもっと全員の共通の話題に切り替えよう」

数馬もそれに気付いたようだった。

「ごめん、ごめん。そうだ、賢たちは最近ずっと海外出張をしてたんだよな。何か面白い話があったらしてくれないか？」

賢は待っていましたとばかりに言った。

「うん、いいよ。だけど、その前におまえ達の新婚旅行の話をしてくれなくちゃな」

亮子が数馬の背広の裾を引っ張って、首を小さく横に振った。賢は亮子がいやがっているのを感じた。

「まあ、普通の新婚旅行だから、聞いてもつまらないよ。それより、おまえの話聞かせてくれよ」

「分かった。じゃあ、ちょっと面白い話をするよ。3度目の出張の時の話だけどね。オーストラリアにアボリジニという原住民が居るだろう。イギリス人に、ほとんど絶滅に近いところにまで抹殺された種族だけど、アボリジニと謂うのは700くらいの種族の総称なんだ。彼らの神話の中に「ドリームタイム」という考えがあって、今もその考え方に従って生きている人たちもいるんだ。ドリームタイムとは、この世界が一種の夢だというとらえ方で、この世界に顕れているものは、精霊の意志に基づいて顕現しているとしているんだ。だから、自然界の全てのものが祈りの対象になる。研ぎ澄まされた意識の世界を見てきたよ。そのドリームタイムの中で、我々は彼らと共に時間を超越した生活をした。およそ半年だったかな。そして戻って来たら、2時間ほどしか経っていなかったんだ。その後、インドのコルカタ、昔のカルカッタだけど、あそこの郊外にあるバウルの町に行って来た。数馬はバウルって知っているか？亮子さんは？」

「聞いたことないな。亮子、知っている？」

「私も聞いたことないわ」

「バウルは、現世的な一切の執着を絶って、詩を唄^{うた}って生きている。まあ、いわば乞食のような神秘家たちのことだ。だけど、彼らの歌う詩は、この世界の真理のように心に響くんだ。一つ覚えた詩を紹介するよ。

大地の上にある間は 自分自身を大地に関わらせよ

私のハートよ

もし、おまえが達しがたき その方に達したければ

彼の足もとに

おまえのフィーリングの花々と 瞳に溢れる涙の祈りを 捧げよう

おまえが探し求めているその人は 大地の中に埋もれている

生きながらにして 死んでいる

死と共に死んで

おまえは生きて

探し求めなければならぬ・・・

どう、感じが分かるかな？こんな詩を唄^{うた}って生きているんだ。パウルの詩は、僕の考えているこの世界を歌い上げているように思えてね」

愛子が言った。

「賢パパ、難しいわよ。ねえ、田辺さん」

「ええ、私にもよく分からないわ」

賢が言った。

「神はこの世界の何処にも居ない。自分の内側に居る。自分が自然そのものだとして理解することだよ。聖書じゃないけど、我々の身体は土から出来ている。やがて土に還る。永遠に変わらないものは自分の内側の本質だけだ。それがパウルの謂う達しがたき方という存在だ。そう思わないか？」

数馬が言った。

「賢、以前より、ずっと確信を持ってきたようだな。おまえの考える写像も、もう不動になってきたって感じだな」

食事が済むと、数馬と亮子は賢のマンションに立ち寄ることにした。全員、マンションまで歩いた。時々頬を撫でる夜風が心地よかった。数馬

が独り言のように言った。

「祐子と亜希子さんはどうしているかな？元気ならいいけど」

みんな黙っていた。

翌日、賢は藤代社長に呼び出された。一人で来るようにと秘書から電話が掛かってきた。賢が社長室に入ると、部屋の中の応接椅子に、総務部長の柳川と久保蔵が座っていた。藤代は柳川にドアを閉めるように言った。

「内観君、実験サイトの方はケリが付いたようだな」

「はい、ご指示頂いたとおり、廃案の処理を行いました。文部事務次官の了承もとりました」

「君一人で処理したそうじゃないか、ご苦労だった。ところで、バーチャルシステム館を各地に建てる件は進んでいるようだが、実際に運用にまでこぎ着けるためには、担当する支社を支援してやる必要があるとは思わないかね」

「はい、そうするのが一番確実な道だと思います」

「私もそう思う。それで、一番先行することになる北海道に誰かを派遣したいと思っているのだが、内観君、君自身が身を投じてくれないか。今度のプロジェクトのことを一番よく理解している者が支援するのが最適だと思うんだ。どうかね」

「はい、それは構いませんが、ただプロジェクト全体の推進と政府との折衝、5社との調整などがやりにくくなると思います」

「それなら、心配要らない。久保蔵くんに替わってやってもらうようにするから、君は全力でバーチャルシステム館第1号の立ち上げに掛かって欲しいんだ」

「分かりました。それは何時からですか？まだ、起工までには時間があると思うのですが・・・」

「地域の人たちとの折衝や、支社の運用についての指導などもあるだろうから、来月からということにできないか？」

「来月からとおっしゃると、2週間後ですか？」

「もっと、早くした方がいいかな？」

藤代は総務部長の柳川の方を見て言った。柳川は

「社長、転勤となると2週間は最低でも必要です。現在のアパートも引き払わなければならないでしょうし」

「内観君、もっと時間があつた方がいいかね」

「いいえ、結構です。何とか2週間で目途を付けます」

「君には、札幌支店の総務部長付きという位置づけで転勤して貰うけど、何か問題はあるかな？」

「いいえ、ありません」

賢は藤代の意図を読み取ったので、理不尽な配転に対して一言も返答をしなかった。社長室を後にすると、賢は直ぐにプロジェクトルームに向かった。楠木と梓が心配そうに部屋に入って来た賢を見つめた。しかし、あっけらかんとして入ってきた賢の姿にふたりとも胸を撫で下ろした。梓が言った。

「リーダー、社長の用件は何でしたか？」

「うん。バーチャルシステム館第1号の立ち上げ支援という名目で、僕に札幌支店に転勤しろという命令だ。2週間後だから少しピッチを上げて仕事を処理しなくてはならないな」

「えっ？何ておっしゃいました？札幌支店ですか？」

「うん。2人とも大変になるけどよろしく頼む」

楠木が言った。

「本社の業務はどうするのですか？」

「久保蔵さんが引き継ぐそうだ。ちょっと心配だけどね」

「大きい声じゃ言えないけど、あのじゃ無理ですよ。文部事務次官や議員連中との折衝や、5社との協議はあの人の知識や経験と手腕じゃこなせませんよ」

「そうでもないさ。結構何とかこなせるものだよ。その人の意識の問題だから、そのつもりになれば何でもできるよ」

梓が目には涙を溜めて言った。

「私も北海道に行きます」

賢はなだめるように言った。

「田辺さん、僕は札幌支店の総務部長付きとして転勤するんだよ。もう、君たちよりずっと下の地位になるんだから、今までのようにはいかないよ。君たちは今のままでいた方が安泰だよ」

楠木が憤って言った。

「意図的な左遷じゃないですか。リーダーが何か間違いを犯したとでも言うのですか。僕はこれから社長に談判して来ます」

「楠木さん、それは止めてください。君まで外されたら折角進めてきたプロジェクトが崩壊してしまうから。僕も北海道から可能な限りプロジェクトを支援するから」

楠木と梓は引き留める賢をも振り切って、ふたりして社長室に談判に行った。しかし、30分もするとふたりは肩を落として戻って来た。プロジェクトルームに入って来るなり梓が言った。

「もう話になりません。わたくしはもう少しで「こんな会社辞めます」と言いそうになりました。でもリーダーの言葉を思い出しました。それで「わたくしも、内観リーダーと一緒にバーチャルシステム館の立ち上げ支援に携わらせてください」とお願いしてしまいました。リーダー、社長は了解しました。わたくしも北海道に転勤します」

楠木が言った。

「結局、私一人だけが残ることになってしまいました。リーダー、何かあったらご支援お願いします」

「楠木さん、申し訳ありません。僕にできることは何でも支援させて貰います」

「社長は酷い方だ。田辺さんには支社の方の企画次長の職を与えました。運用プロジェクトと共同出資の新会社の社長職を見据えて勤務するようにとのことです。リーダー何も抗議されなかったのですか？」

「いいじゃないか。それもまた一つの流れだよ」

楠木が言った。

「もう、悟ったようなことをおっしゃらないでください・・・いいえ、悟っていらっしゃる・・・そうです、リーダーは悟っていらっしゃる。いやになるな、こんな会社社会・・・いや、よしましよ。リーダー、

今日は一杯やりませんか？」

「そうだね、久しぶりに3人でうまいものでも食べに行こうか」

3人は築地の寿司店、銀城で卓を囲んだ。先ず刺身の盛り合わせで杯を傾けた。

「リーダー、なぜ何もおっしゃらないんですか？僕にはどうしても解せません」

「この程度のこと、争う意味もないよ。僕は恵まれているんじゃないかな。部長付きだから、まだ自分の意見なんかも言えるだろうしね」

「いいえ、リーダーはご存じないんです。北海道支社、札幌支店は島流しの札幌といわれているんです。あそこの総務部長はまるでごろつきです。客先に対しては当たりがいいので、本社も我慢しているんですが、あの人の下に附いた人は1ヶ月ともたないです。だから、当然ゴマすりが見え見えの部下しか居残っていないんです。あの人がなぜあんな役職に着いていられるかと云うと、社長にコネがあるからなんです。遠い親戚に当たるらしいんです。それを笠に着て、威張り散らしているようです。だけど、あの人が自分より偉い人の前に出たときの様子ときたら、まるで借りてきた猫なんです。リーダー、1ヶ月もてば大したものですよ。全くふざけた人事です。僕も厭になりましたよ」

「私がリーダーをお守りします。札幌の総務部長は何ていいましたっけ？」

「安芸津です。あんなやつは会社から追い出すべきなんだ」

「楠木さん、ありがとう。いきなり攻撃されなくてよかった。心の準備もできるしね。それより、バーチャルシステム館の起工は何時になるのかな？」

「まだ、半年先ですよ。なぜこんな時期に北海道くんだりまで行かなきゃならないんだ。全く、正気とは思えないですよ」

「まあまあ、そう怒らずに、いっぱいやりましょう」

賢は楠木に酌をした。梓も何時にないピッチで杯を傾けていた。

「リーダー、出張報告がまとまりましたので、明日ご説明いたします。報告する気力も無くなりましたけど」